戦車長と音楽厨二人の鉄血世界

砂原凜太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デメジエール・ソンネンは遠吠えと共に散った。そして、そんな時代に取り残された男に軍神は手を差し伸べる。彼と共に戦場を掛けた狼となって。

ダリル・ローレンツとイオ・フレミングは殺し合った。そして、その壮大な戦いの果てに、一つの家族ともいえる固い絆で結ばれた孤児たちの元へと旅立った。そして、二人は戦う。奪うためではなく、守るために、殺し合ったライバルではなく、肩を並べる戦友として。

この小説にはオリジナルキャラクター多数。原作崩壊、オリジナル設定満載、キミガシネ、狼ゲーム、そしてメタルギアシリーズなどの多作品キャラが満載です

それがＮＧな方はブラウザバックを推奨いたします。

目次

緑狼は鉄血の孤児たちの元へ ―― 1
革命の乙女と、ＣＧＳ防衛線 ―― 6
第三話目覚める ―― 13
第５話動き出す ―― 20
第五話　黄昏の果し合い ―― 31
宇宙の戦い ―― 39
エースＶＳエース ―― 49
アサシン・ホーク ―― 61
強力な助っ人。しかし、奇人変人の集まりで？ ―― 67
束の間の休息 ―― 74
束の間の休息　後編 ―― 82
槌頭の蛇との邂逅 ―― 90
培った物 ―― 104
犀星《迫る影》 ―― 109

緑狼は鉄血の孤児たちの元へ

「へ……へへ……、惜しかったな……。」

俺と相棒を潰した男が、去って行くのを感じる、俺と相棒の命が、潰えて行くのを感じる。だが、まだ死んじゃぁいねぇ。

最後の力を振り絞り、照準鏡を覗きこむ。去って行く０６の姿が見える。死ねよ。盗人野郎。お前なんかに、俺達の誇りを潰させやしねぇよ。

装填されていた装弾筒付翼安定徹甲弾（APFSDS）を、引き金を引きぶっ放した。

「はん。一発あれば十分だ。」

もう俺の命ももたねぇか。そんな事を思いながら、いらなくなったドロップの箱を捨てる。

「ヒルドルブ……俺はまだ……戦えるん……だ。」

チクショウ。こいつの有用性がやっと示されたんだ。やっと。こんなとこでまた沈んで……たまる……かよ……。

アオオオオオオオオオオン

狼の遠吠えが聞こえた気がした。

「……い、……ンタ、……ぶか？」

何やら声が聞こえる。どうやらお迎えが来たらしい。

「ああ、大丈夫だ。今起きる。」

俺が起きたのは簡易ベットの上だ。俺の隣にいるのは緑のジャージを羽織って、質素な服に身を包んでいる。褐色肌で白髪の男。その風貌はまるで少年兵だ。

「驚いたぜ。アンタがこの間見つけたデカい戦車の中でぶっ倒れてたんだからよ。」

「戦車!?ヒルドルブ（俺の相棒）の事か!?」

　こいつら何だ？ゲリラか？だとしたら何で俺を助ける？
「あ、ああ。多分その事だと思うぜ。」
「というか、ここは何処なんだ？」
「は？アンタ頭でも打ったのか？ここは火星だろ？」
「へ？火星？あの？」
「太陽系の火星がアンタが言う火星ならその火星だ。」
！？！？！？！？おいおい、こいつはどういう事だ？俺は地球で死んだはずじゃ……。
「おい、お前、ジオンって聞いた事あるか？」
「ジオン？いや、聞いた事ねぇな。どこかの都市か？」
　ジオンを知らない、ってことはやっぱり、
「なあ、今は何年だ？」
「おいおいアンタ、マジで大丈夫か？医者行ったほうが良いんじゃないだろうな？今はＰ．Ｄ（Ｐｏｓｔ　Ｄｉｓａｓｔｅｒ）３２３年に決まってんだろ？」
　聞いた事のない年号、やっぱここは異世界なのか？
「悪い、情報が欲しい。この世界の事とかお前の事とか、いろいろ教えてくれ。」
「は、はあ、良いぜ。」
　そうして、話してくれたことをまとめるとこうだ。
　１．この世界は、無人型殺戮兵器モビルアーマーとの戦争【厄災戦】で駄目になった。
　２．地球はギャラルホルンという連邦のパチモンが支配してる。
　３．火星は掃き溜め。彼、参番組隊長のオルガ・イツカらはＣＧＳという派遣警備会社の社員。ただし、阿頼耶識というデバイスを付けているため『宇宙鼠』と蔑まれているそうな。
「なるほどな。」
「ったく、この説明したのお前で三人目だぞ。」
　ん？ちょっと待て、それって、俺以外にも転生者がいるって事か？
「そいつらは何処にいるんだ？案内してくれ！」
「あ、ああ、ウチで雇って、今一軍に居るからまずはお前を雇わない

と、」
「じゃあ雇ってくれ！面接なら受ける、俺は戦車訓練場の元教官だったんだ。お前らの教育係にピッタリだと思うぜ。」
「そ、そうか、待ってくれ、社長に話をつけてくる。」

「で、アンタが今回の行き倒れか。アンタ、元は遠くで教官をやっていたそうだな。ガキ共のしつけ、頼めるか？」
　そう言ってくる肥満体型の男、社長のマルバ・アーケイだ。いったいいちで面接をしている。
「応よ！任せとけ。どこに出しても恥ずかしくない様な立派な軍人に仕立て上げてやるぜ！」
「いや、うち等は軍じゃないんだが……まあ何でもいい。よろしく頼むぞ。」
「応よ！こっちも頼むぜ!!」
「ああ。」
　マルバの手をガッチリと握った。
　社長室を出て行くときに、
「今月三人目の行き倒れ……ウチは慈善事業じゃねぇんだぞ。まったく……。」
　とぼやくのが聞こえた。なんだかんだで雇ってくれんのは優しさだろうが。とにかく、今日から頑張るとするか。
　とりあえず、今の時間は午後十時、勤務は明日からだそうなので、一軍を覗きに行った。オルガに俺と同じことを言った二人の名前は教えてもらった。
「おい、ダリルとイオってやつらは居るか？」
　一軍の寝床に顔を出すと、ごつい顔の男が出て来た。
「あいつらは別室だ。うるさいからな。」
「そうか。じゃ、道を教えてくれ。」

そう言うと、男の表情が急変した。
「何だその態度はぁ!!」
「うおっと!」
いきなり拳が飛んできたので、避けた。
「いきなり何すんだよ!危ねぇな!」
「貴様こそなんだ!!俺は一軍の隊長だぞ!!敬語を使わないなんてふざけた話があるか!!」
「悪かったな知らなかったんだよ!!」
「知らなかったですませられるか!!そんな甘ったれた根性は俺が叩き直してやる!!」
あ?お前喧嘩売ってんのか?
次の瞬間、男に俺の右ストレートが直撃した。男はドスン!と大きな音を立てて倒れ、頬を抑えた。
「テメェ!ハエダさんに何しやがる!」
「キンギョのフンは黙っとけ。」
「なっ……。フ……。おまっ……。」
出っ歯の野郎が何か言って来たが一睨みで黙らせた。
「『知らなかったは甘え』だぁ?お前よくそんな口が聞けるな。」
「ひ、ヒィッ。」
胸ぐらをつかみ上げる。
「俺は元々ある場所で教官をやっててな、お前みたいな薄汚い教え子はどうしたと思う?」
「え、えっと……」
「こうすんだよ!!!」
殴る。
「お前みたいなぁ!!!!」
殴る。
「心の底から腐ったようなやつはぁ!!!!!!!」
殴る。
「修正してやる!!!!」
ただひたすらに顔面を殴る。

ハエダの顔面が腫れあがり、もう顔の原型がわからなくなったところで、
「その辺にしておけ。確かに煮ても焼いても揚げても茹でても食えない様なクソ野郎だけど、生かしておかないと困る。」
という声が聞こえ、振り向くと、そこに居たのは天然パーマの男だ。両腕は義手になっており、片手に古いラジオを抱えている。
「お前は？」
「ダリル・ローレンツだ。ここの一軍の人間だよ。」
「お前がダリルか、丁度いい。話したいことがあったんだよ。」
「？」
「ジーク・ジオン。」
「ッ！」
俺が耳元で囁いてやると目を見開いた。
「今、空いてるか？」
そう聞くと、ダリルは無言でうなずいた。

革命の乙女と、ＣＧＳ防衛線

こっちの世界に来てから、もう二ヶ月がたった。早ェもんだ。
今はあいつ等とは別のとこで、昼食休憩を取ってる。
「よう、ソンネン、相変わらずこいつらの教育で引っ張りだこか？」
そう言って来たのはツンツンした金髪の男で、一軍のジャージを着ている。
「その言い方はねぇだろ。イオ。」
もと、地球連邦軍のパイロットで、かつてダリル・ローレンツと殺し合った男だ。俺はこいつがあんまり好きじゃねぇ。
「俺は事実を言ったまでだよ。それより、聞いたか？今度の大口の取引。」
「ああ。あの『革命の乙女』を地球まで運ぶんだってな。」
「俺はこの世界の地球を見たことがねぇからな。ちょっと楽しみなんだよ。」
「分かるぜ。その気持ちはな。でもよ、聞いたか？その任務、お前ら参番組が受け持つらしいぜ。」
「ブフッ!!」
その言葉に俺はコーヒーを噴出した。
「おい、冗談だろ。んなの威張り腐った一軍（クソ共）が承諾する訳……。」
「勿論だ。事実上、参番組は承諾するだけ。いつも通り、一軍（無能共）の指揮のもと執り行われるよ。」
「やっぱりかよ。」
「そう言うもんだよ。それに、クーデリアとなっちゃ、」
「十中八九、ギャラルホルンが動くよな。」
ギャラルホルン、それは世界の治安維持を承っている組織だ。こいつらに『都合のいい世界』にはクーデリアは不要だ。
「今日お嬢様がこっちに来る。早けりゃ今日にも。」
「ああ。そこらへんはプロだろうな。」
二人とも、警戒を露わにしていた。
「イオ、ダリルに伝えとけ、アレの準備をしとけってな。」

そう言うと、ニヤリ、と笑った。

「おい、オルガ、」
緑のジャージを身に纏った男、参番組の隊長を務めてるオルガ。俺を拾ってくれたやつだ。
「おお、教官、これから依頼主に会いに行くところだ。」
「そうかよ。ちょうどよかった。お前ら、奴さんへのあいさつはお前らでやれ。」
「それはいいけどよ、アンタはどこ行くんだ？」
「周辺を見とくよ。今日辺り、来るかもしんねぇ。」
「なるほど。」
それだけの会話で、話は終了した。

一方、火星の上空、そこにそびえ立つギャラルホルン火星支部、『アーレス』内、火星支部長を務めるコーラル・コンラッドは、ついさっきまでいた客に、ため息を付いた。
「クーデリア・藍那・バーンスタインの情報を売るとは、それでも父親か……娘の爪の垢でも煎じて飲むと言い。」
「全く。」
愚痴るコーラルに賛同するようにそう言ったのは、同じようにギャラルホルンの制服を身に纏った、水色の髪の青年だ。今は、花瓶の水を入れ替えている。
「しかし、クーデリア・藍那・バーンスタインか。全く。このような案件、本来は受けないのだが、」
「アイツとの関係を続けるためには、やんなくちゃなんないんだろ？

コーラル。」
「呼び捨てにするな。お前は私より階級は下なのだからな。」
「はいはい。わかってるさ。そんな事。それより、俺も出ればいい？」
「いや、お前は待機だ。クランク、オーリス、アイン、それから、レイとツィリの編成で行ってもらう。」
　そう言うと、彼は驚いたかのように手を止めた。
「ＭＳを五機も？それに、クランクまで？」
「ああ。念には念を入れないとな。」
「何でそこまですんのさ？相手はＭＳを持ってないんだろ？だったら俺が出れば相手もドゲザ降伏すると思うけど。」
「わかっとらんな。お前は。」
　そう言うと、タブレットを青年の方に見せた。
「エイハブ・リアクターの反応だ。」
「マジだ。ＣＧＳ（目標）の地下からか。」
「ああ。しかも、この周波数は、」
「ガンダムフレームタイプ。」
「ああ。固有周波数の特定までは出来なかったが、相手はＭＳを所持している。間違いなくな。」
「しかもガンダムフレームタイプとなると、」
「クランク含め、グレイズ三機でやっとって所だろうな。」
「だから連携に長けた二人と、クランクの教え子の二人か。伝えとくよ。」
「いや、私も行こう。」
「りょーかい。」
　こうして二人は、執務室を出て、ＭＳデッキへと言った。
「クランク!!」
　近くで整備のチェックをしていた獅子を思わせる獅子を連想させる風貌の中年の男、クランクに声をかけた。
「火星に出向き、ＣＧＳをＭＷ部隊と共に制圧しろ。そして、クーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を確保しろ。部隊はオーリス、貴様、アイン、ツィリ、レイで行え。」

「了解!!」
次に声をかけたのは金髪の男、オーリス・ステンジャだ。
「オーリス!!貴様が指揮を取れ。」
「はっ!!。」
こうして、クーデリア襲撃が計画された。
「ウィリアム、貴様も待機しておけ。」
「りょーかい。」
水色の髪の青年、ウィリアム・ニルバーもコーラルの指令に頷いた。

翌朝、襲撃は早朝の夜明けとともに始まった。大量のＭＷ群、全て、ギャラルホルンの最新式だ。
それに対し、オルガの相棒、三日月オーガスや、ヒューマンデブリと呼ばれる金で売買されている立場の青年、昭弘・アルトランド、派手好きな青年、ノルバ・シノと、エース級のパイロットが集まってる。それに、俺様直伝の教育があるからな。それに、
『ソンネン、レーダーがとらえた、伏兵だ。』
ダリルのＭＳ、【強行索敵型アッガイ・改式】の武装、【三次元スキャニングレーダー】と、【レーザー通信装置】により、俺とヒルドルブにリアルタイムで情報が届けられる。
確認すると、３０機程のＭＷがこっちに向かってきた。流石はギャラルホルン、大層な兵力をしてやがる。
「了解。こっちは任せな。」
照準器を下げる。距離は２０㎞って所か。
「まずはファーストコンタクトだ。ＡＰＦＳＤＳを装填、発射!!」
相棒のの主砲、３０㎝砲が火を噴いた。

《三人称視点》

ＭＷ部隊は、完全に油断しきっていた。ＭＳがいることもあり、彼らは手柄を取ろうと焦ってたのかもしれない。そしてその結果、接近する砲弾に対する回避が遅れた。

ヒルドルブのＡＰＦＳＤＳの火力は、１０㎞離れた距離に居るザクを一撃で吹き飛ばすほどの火力である。それを、ＭＷがくらえばどうなるか、答えは簡単。

ＭＷの一機が、直撃を受けバラバラに吹き飛び、貫通した砲弾が、後ろの機体も、その後ろの機体も貫いた。３３機編成のＭＷ部隊、その６機が、瞬く間に吹き飛んだ。

「え？」

ＭＷ部隊の隊長が漏らしたのは、そんな一言だった。

ＡＰＦＳＤＳの初段が命中し、数機まとめて吹っ飛んだ。それに混乱した他のＭＷも動きが止まっている。

「ったく、訓練がなっちゃいねぇな。それでも軍人かよ……。次は、Ｔｙｐｅ（対空散弾）—３を使ってみるか。」

砲身が上を向き、Ｔｙｐｅ—３弾が放たれた。

一塊になっていたＭＷ部隊に、悲劇は降りかかった空中で無数の弾丸へと変わった砲弾は、雨のように降りかかり、瞬く間に５機のＭＷが吹き飛ぶ。

そこで、恐怖に駆られた隊長が、慌てて指示を出した。

「さ、散開!!散開!!散れ、散れェッ!!」

大慌てで指示を出し、それに従いＭＷ部隊は散り散りになった。

「へっ、敵さんもようやく動いたか。俺も暴れるとするかね。」
操縦かんを動かし、ヒルドルブを後進、塹壕から出て、前進した。

突っ込んでくるヒルドルブに、ＭＷ隊の隊長は、ニヤリ、と笑った。
「馬鹿め!!車高の低いＭＷに近距離で砲弾が当たるものか!!全軍、あのゲテモノを落せ!!キャタピラを壊し、鹵獲してやれ!!」
『『『『『了解!!』』』』』
そうして、ＭＷ達は、ヒルドルブに突っ込んでいった。しかし、それが悪手だったことを、その数分後痛感することになる。

「案の定、つられてくるか。まあこのナリじゃそうするよな。」
見せてやるぜ、こいつの恐ろしさを。
「スモーク散布!!」

ＭＷ達がヒルドルブに近づいた瞬間煙がばら撒かれ、ＭＷのパイロットたちは困惑した。
そして、数分が経過し、煙が晴れた時、隊長は、もう開いた口がふ

さがらなかった。ヒルドルブの砲塔は持ちあがり、中からはＭＳの上半身が、両手にマシンガンを持ったＭＳの上半身が出て来たのだ。そして、そのマシンガンによって放たれたであろう攻撃で、ＭＷ部隊はほぼ全滅し、残すところ三機となっていた。

「ば、ば、ば……」

隊長はトリガーを引いた。引きっぱなしにした。ＭＷの主砲から、弾丸が継続して放たれる。

「化け物め!!」

そう叫び、撃ち続ける。しかし、ヒルドルブの装甲は、そんな砲撃をものともしない。逆に、ヒルドルブは他のＭＷを狙い進みだした。その進行方向には、隊長機が……。

「ヒッ、」

慌てて下の操舵手が反転して下がる。隊長は悲鳴を上げながら、砲塔を旋回させ、ヒルドルブに砲を連射する。しかし、そんなのが意味ある筈も、最高時速１１０㎞のヒルドルブから逃げきれるはずもなく、彼らは悲鳴を上げながらひき潰された。

第三話目覚める

ソンネンが裏手で圧倒している一方、正面を守る参番組は、ソンネンが叩き込んだ動きと阿頼耶識の力も相まって、ＭＷ同士の戦闘は比較的互角に進んでいた。

それも、隊長であるオルガが出した命令で、主力でありエースの、三日月が下がっている状態でである。

その勝利に貢献しているのは、小高い丘に居る、ずんぐりとしたＭＳだった。右手の装甲が開き、そこから展開されているセンサーは、【三次元スキャニングレーダー】。これにより敵の位置と味方の位置をスキャンし、レーザー通信機でその情報をリアルタイムで届け、団長であるオルガが適切な指示をしているのだ。

その機体、【強行索敵型アッガイ改式】のコクピット内にはラジオがかかり、オールディーズが流れている。それを口ずさみながら、レーダーに目を向けているのは、ダリルだ。すると、ダリルのコクピットに、通信が入って来た。

『おいおい義足野郎、俺の出番はまだなのかよ？』

イオだ。ＣＧＳ一軍のジャージを身に纏い、話しかける金髪の男、イオだ。

「ダリル・ローレンツだ。名前くらい覚えろ。ＭＳの反応はまだない。このレーダーならエイハブ・ウェーブも感知できるみたいだから見つけたら報告……反応が来た!!」

『マジか!!ようやくだな。』

「敵ＭＷ隊も下がり始めた。オルガ、オルガ聞こえるか⁉」

『おう、どうしました？ダリルさん。』

「ＭＷ隊が下がり出した。予定通り後退してくれ。」

『ああ、それなら教官に言われた通り後退してます。安心してください。』

「そうか、良かった。イオ、すぐに向かってくれ。」

『そうか、良かった、イオ、すぐに向かってくれ。』
「ご注文承りました～♡」
その報告を聞いて、イオはそんな調子付いたような返事をして通信を切り、コクピットにテープで張り付けてあるＭＰ３プレーヤーのスイッチを入れた。
すると、ハイテンポのトランペットソロから始まる、ジャズが流れた。
「こっちに受信できる放送局が無くなっちまったからな。テープ録音があって助かったぜ。」
そう言うと、アクセルを踏み込む。
アトラスの背中から生えたサブアームが持つ大型ブースターにより勢いよく飛び出すイオの愛機、アトラスガンダム。
そのままアトラスの待機場所、ＣＧＳ裏手から飛ぶと、まっすぐ飛んで行く。確認すると、ＣＧＳ参番組のＭＷ隊、そして、奥を確認すると、ギャラルホルンに追い掛け回されている、少年たちを置いて逃げようとしたＣＧＳ一軍のメンバーたち。
「ん？なんであいつら（ゴミどもが）追い回されてんだ？まあ、いいか。」
更にＭＷ隊の奥を見ると、右手にライフル、左手に無骨な斧、バトルアックスを構えたダークグリーンの機体、ギャラルホルンの量産ＭＳグレイズが５機、ホバー移動で向かってきている。
「あいつらね。さてと、まずは警告から行きますか。」
そう言うと、右手のレールガンを展開する。
真ん中の機体の足元目掛けて、一発放った。
吐き出された弾丸は、イオの知る由もないが、指揮官、オーリス・ステンジャの足元に命中した。
『な、何だ!!』
『慌てるなオーリス、上だ。』
いきなり目の前に勢いよくレールガンの弾が着弾し、機体を止め驚くオーリス。
しかし、オーリスの師であるクランクは、オーリスに上を確認する

ように促す。
　オーリスが上を見ると、そこにはブースターを下に向け、飛んでいるアトラスの姿があった。
『あ、あれは……』
『ＭＳだ。まさか隠し持っていたとは、コーラル三佐がＭＳを出せと言ったのはこういう事だったのか。』
『オーリス一尉、指示を!!』
　オーリスと同じクランクの教え子、アインがオーリスに指示を促す。しかし、アトラスとイオはオーリスの判断など待ってくれなかった。
「もたもたしてると、撃ち抜くぜ!!オラァ!!」
　一発、またレールガンが放たれる。
　クランクに向けて放たれたそれを、クランクはとっさに躱した。
『オーリス!!しっかりしろ、ええい、散開してライフルで攻撃しろ、あのブースターを狙えそうすれば地上戦になる。』
　クランクが、指示を出す。
『『了解!!』』
　オーリス以外の３人は即座に従い、右手のライフルで攻撃する。
『あ、わ、私も……』
　オーリスも我に返り、アトラスに向け銃を放つが、アトラスは地上とは思えないバーニアで飛び回る。
「オラどうした!!天下のギャラルホルンってのはその程度か!!」
　急停止、急加速、急旋回、そして、獲物をレールガンからアサルトライフルに持ち替え、発砲する。
　そして、動きが鈍いオーリス機に向かってバーニアを吹かす。
『ヒッ!!く、来るなぁッ!!』
　脅えてライフルを乱射するが素早く背後に回り込み躱し、コクピットを狙う。が、
「オラァッ!!」
『オーリス!!』
　いざ振り抜かんとした時、クランクが放ったライフルの弾丸で体勢

が崩れ、イオの一閃はグレイズの右腕を切り飛ばすのに終わった。更に、スピードを出していたこともあり、体制が崩れ、ブースターを吹かすことで何とか着地した。
『ツィリ、レイ、アイン!!押さえろ、接近戦で仕留める!!』
『『はい!!』』
クランクがライフルを捨て、バトルアックスを構えてアトラスに向かった。
『な、何なんだ……。』
その様子を見てオーリスは、恐怖した。あの黄色と白のＭＳに、それもそのはず、ＭＳの動力源、エイハブ・リアクターが発するエイハブ・ウェーブと、特殊コーティングが生み出すナノラミネートアーマーは並みの射撃武器では撃ち抜けない堅牢な装甲だ。それを、あのＭＳはいともたやすく斬って見せたのだ。正確には、発熱する刀身がナノラミネートアーマーを焼き溶断したのだが、絡繰りを知る由もないオーリスはただただ、恐怖した。だが、
『……？あれは……。』
ふと、メインカメラがとらえたのは、撤退するＣＧＳのＭＷ部隊、それも見た瞬間、オーリスは思った。
『や、奴らを……人質にとれば……。』
あの化け物のようなＭＳも動かなくなるに違いないと考えた。
見せしめでもすれば、嫌でも従うだろうと。
『フ、フフフ。あれで、あれでぇ!!』
コーラルはグレイズのバーニアを吹かし、飛び上がった。
「ッ!?しまっ……。」
それにイオが気付き、コーラルを止めようとするが、運悪く、クランクがバトルアックスをぶつけて来た。
『行かせん!!』
「チッ、邪魔なんだよ!!」
再びヒートソードを発熱させ、アックスを溶断しグレイズの頭部カバーまでも溶断する。
『ぐぅ……オオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!』

しかしクランクのグレイズはそのままアトラスに組み付き、バーニアを吹かせた。
「ッ!!退けっつってんだよこのッ!!」
それを振りほどき、レールガンを構えるが、
『させない!!』
『コーラル隊長はやらせません!!』
双子の兄弟、ツィリとレイがライフルを撃ってくる。
「ッ!!クソが!!間に合え……。」

同じころダリルも、オルガも、グレイズが一機、こちらへ向かってくるのに気が付いた。
「おいおいどうするよオルガ!!頼みの綱のＭＳが抜かれ……。」
「まだだ!!まだ終わっちゃいない!!なぁ、そうだろ?」
ユージンは慌てふためくがオルガは叫ぶ。友に向けて、
「間に合ってくれ、頼む、」
ダリルは祈るとある少年に向けて。
『ヒャハハッ!!貴様が見せしめだぁ――――ッ!!』
そして、オルガの機体に、グレイズの斧が振り下ろされようとした時、
「三日月っ!!」
「ミカァッ!!」
「三日月君!!」
三人の思いが、叫びが、祈りが届いたかのように、正面の地面が砕け、一機のＭＳが飛び出してきた。
これこそが、エースの三日月が欠席だった理由。彼の駆るＭＳ、ガンダム・バルバトスがこの地に、オルガを守るように立ちはだかった。
『……え?』
コーラルが最後に呟いたのは、そんな声だった。その瞬間、
グシャァッ!!

と凄まじい音がし、コーラルの駆るグレイズを叩き潰した。
『もう一機いたのか⁉』
『クランク先生!!』
双子の兄、銀髪で右目が黄色左目が青のオッドアイの青年士官、ツィリ・リヒテンダールはクランクを先生と呼び慕っている。弟で金髪青目のレイのグレイズとアトラスにライフルを発砲している。
『ＭＷ隊の撤退を確認。俺達も退却を俺たち三機とその機体では、あの二機には勝てません。先生、撤退の指示を!!』
ツィリの言うとおり、クランクの機体は頭部カバーが破損し、アックスも失っている。
『裏手の強襲部隊とも連絡が取れねぇ。化け物が!!ッつう通信が入ってそれっきりだ。ＣＧＳを落とすのは今の戦力じゃ無理だぜ!!そこらの海賊より手ごわいじゃねぇか!!』
弟のレイもそそう言い指示を仰ぐと、
『そうだな。撤退する!!しんがりは俺が……』
『だから無茶しない!!』
ツィリがそう言い自分がしんがりを務めようとした時、
『逃がすわけないだろ。』
バルバトスがメイスを振るい突っ込んで来た。
『ッ⁉先生、下がって!!』
ツィリがバルバトスのメイスを止めると、
『チッ。邪魔だなぁ。』
と、三日月が呟いた。
『ッ⁉その声、お前、まさか……子供⁉』
『何ッ⁉』
ツィリの声にクランクも驚くが、
『ああそうだよ。お前たちが殺しまくったのも、』
『ぐっ、も、申し訳な……』
『これから、アンタらを殺すのも……!!』
明確な殺意を持ち、バルバトスがメイスを振り抜く。
『ぐぁッ!!』

『兄ちゃん!!』
ツィリも吹き飛ばされる。
『レイ!!ツィリを担げ!!ここは退くぞ!!』
『りょ、了解。』
レイはそう言うとオプション武装であるスタングレネードを投げつけた。
『ッ!?前が……。』
その隙を突き、彼らは撤退していった。
『チッ、逃がすか……!!』
『待てよ。ここはひとまず戻ろうぜ。』
三日月がバルバトスのバーニアを吹かせ追撃しようとしたが、それをイオがとめた。
『……うる……さ……い……。』
『おい、おいどうした!?おいミカ坊、返事をしろ!!』
しかし、バルバトスは動かなくなり、三日月は意識を手放した。

第５話動き出す

火星が騒がしくなっている頃、件の火星基地、アーレスへと向かっている船があった。ギャラルホルン監査局の船だ。
「特務三佐、あと数時間で、アーレスに到達します。」
その声を聞き、船の艦長席に座る青年、セブン・スターズと呼ばれる七大貴族、その一角ファリド家の御曹司、マクギリス・ファリドは満足そうに微笑んだ。
「分かった。アーレスに付いたら仕事だ、皆、心してかかってくれよ。」
と、マクギリスは声をかける。
「どうせ退屈な書類仕事だろう?そんな下らないことをするためにアーレスに出向くとは、監査局もやだねぇ。」
すると、後ろからマクギリスと同じ年頃の青年が入って来た。整えられた、黒髪、目元の赤いチークは、持ち前の切れ長の目と合わさってどこか鳥を連想させる。
「お前は少し勤勉と言う言葉を覚えたほうがいいぞ。リーヴァル。」
すると、ムッとした顔つきをした紫色の髪をした青年が入って来た。
「まぁそう言うなよガエリオ。それに、不正のあら捜しだなんて退屈な仕事、ボクには向かないよ。」
ガエリオと呼ばれた青年に、切れ長の目の青年、リーヴァルはそう答える。
「仕事に退屈さで優劣をつけるな!!お前も俺も、セブンスターズの子孫として後に世を背負って立つ男なんだぞ!!ましてやお前の父上、バクラザン候は……。」
セブンスターズの一席、ボードウィン家の末裔、ガエリオがそう言うと、同じくセブンスターズが一席、バクラザン家の嫡男、リーヴァルは肩を竦め。
「分かっているさ。ある程度の『政治』はやるつもりだよ。ただねぇ、ボクは相棒と空を掛け、ＭＳ戦を楽しむ方が好きなのさ。」
そう言い、壁に寄り掛かるリーヴァル。それを見たガエリオは、

「全く、お前と言う奴は……!!」
　そう言いまだ何か言おうとしたが、
「まぁまぁいいじゃんガエリオ。リーヴァルのヤローには、ＭＳに乗って厄災戦を終わりに導いた異次元の強さを持つイカレパイロットの先祖の血が色濃く流れてんだろ。」
　そう言って、オレンジ色の軍服を付けたオレンジ髪の青年が入って来た。どこか女性じみた顔つきの彼は、口元を口のイラストの付いたパネルで隠している。
「おいおいロエル。その言い方は無いんじゃないかい。消されても知らないよ。」
　肩を竦め、リーヴァルはそう言う。
「でもねぇ、陰じゃぁ、もっぱらの噂だよ。失われていたはずのバクラザン家のガンダムフレームをなぜか使う、戦闘狂の嫡男って。」
　パネルを誰かにひそひそ話しているような形の物に素早く、口元が見えないレベルのスピードで切り替え、そう言う。
「と言うか、相変わらずなんだそのパネルは、」
「え～別にいいじゃん。アクセサリーはオッケー何だからさぁ。」
　そう言う彼の名は、ノエル。トト・ノエルだ。名前は服装から勘違いされやすいが、彼曰く、れっきとした男性らしい。真実はさだかではないが。
「そう言う問題ではなくて、ギャラルホルンの軍人として、の責務を……。」
　そして、ブリッジで言い合いを始める三人。
「君たち、一応ここは公共のブリッジなんだ。そう言う言い合いは、自室でやってくれないかな。」
　すると、マクギリスがそう言う。
「おっとそうだね。すまなかったよ。それじゃぁボクは、自室に向かうとさせてもらうよ。」
「お、じゃぁ俺もそうしよ～。」
　そう言って、リーヴァルとノエルはブリッジを出て行く。
「あ、待て!!まだ話は終わっていないぞ!!」

ガエリオも、それを追いかけて出て行った。
「全く、にぎやかだな。」
それを見届けたマクギリスは、そう呟いた。その時、どんな表情をしていたのか、見る者はいない。

一方火星の地上基地、そのドックで、クランクは自分の愛機が、あと数日は出撃できない状況になっているのを知り、いらいらと壁を叩いていた。
「クソッ!!」
(戦っていたのは……子供だった……!!ギャラルホルンの軍人として、子供に危害を加える訳にはいかに。かといって単独で動こうにも機体が……。)
そう呟く彼の焦りは、募るばかりだった、すると、
「どうも。」
「ッ!?」
声がした。とっさにクランクが振り向くと、そこにいたのはギャラルホルンの軍服を着た、黒髪の男性だった。
「誰だ?」
「私はただの一般兵ですよ。貴方にこれを渡せと依頼を受けたので、渡しに来ました。」
無表情で、長髪の男性はそう言う。
「依頼?誰からのだ?」
「申し訳ないですがそれは言えませんねぇ。それより、こちらを。」
そう言って渡してきたのは、紙だった。
「何だ?これは。」
「さぁ?私は何も、ただ、子供を救う唯一の方法とだけしか。」
「何ッ!?」
「役目は果たしました。それでは。」
「待てっ!!」

咄嗟にクランクは、男を呼びとめた。
「貴様、名前は。」
「……そうですね。一応、名乗っておきますか。カイと申します。それでは。」
カイと名乗った男は、そう言って立ち去ろうとしたが、一度立ち止まり。
「ああ、忘れていました。これを。」
そう言って、カイは何かを投げてよこした。とっさにクランクが受け止めると、ライターと、ＵＳＢメモリだった。
「これは……。」
「これも渡しておけと言われていたんです。うっかりしていました。では。」
そう言うと、今度こそ、通路を曲がり、消えて行った。
「何だったんだ。奴は。」
そう呟いたクランクだったが、
「まぁ良い。子供たちを救う方法とは何だ？私も考えていたが、しかし機体が無い事には……。」
そう思い、紙を見た。そこに書かれていたのは、
クランク二尉、貴公の性格からして、ＣＧＳのヒューマンデブリたちを助けようとするだろう。だが、貴公のグレイズの状況を聞いた。
実はエレベーターには、ある仕掛けがある。階数のボタンを正しい順番で押せば、地下の隠し部屋に行きつくようになっているのだ。
そこに安置されているＭＳをくれてやる。それで、貴公の計画を遂行しろ。方法は下記に記す。
かなりのじゃじゃ馬だが、お前なら使いこなせるだろう。後はこちらに任せておけばいい。私と『あの方』で何とかして見せよう。
追伸　これは私からの選別だ。貴公の正義に、光があらんことを。

コーラル・コンラッド

「……感謝します。指令。」
それを見たクランクは、紙をライターで燃やし、すぐさま実行に移した。
誰も載っていないのを確認しエレベーターに乗り、階数ボタンを順番に押す。そして、エレベーターを降りて行った。
チン。と音がして、クランクがドアを開けると、そこには白い装甲を持った中世騎士のような風貌をしたＭＳが、鎮座していた。
「この機体は……。」
驚いたクランクだったが、すぐさまコクピットに飛び乗り、機体を起動させようとした。しかし、起動ボタンが見当たらない。
すると、ＵＳＢの差込口があるのに気が付いた。
「もしや、これがか？」
そう思い、先ほどカイから受け取ったＵＳＢを差し込む。
すると、コクピットに光が灯った。画面に文字が映る。
「ヴァルキュリア、フレームタイプ。シグ……【シグルドリーヴァ】？それがこの機体の名前か。まずは……。」
コクピットの操作マニュアルを映し出す。そこにあったのは、グレイズと全く同じの操作方式だった。
「動かし方はグレイズと変わらんか。次は、」
武装のデータを起こす。
「【ドーバーライフル】？レールガンと実弾二種類の弾を発射可能な武装か。使い慣れたグレイズ・ライフルもあるのか。
そしてシールドと、サーベル。武装は分かった。あとは、動かしながらなれるか。」
立ち上がり、辺りを見渡すと、赤い布が置いてあった。
「これは、」
見ると、マッキーで、何か書かれていた。
選別です。先生。止めはしません。
ツィリ・リヒテンダール
それを見ると、クランクはフッ、と笑った。
「恩に着るぞ……。ツィリ。」

肩のクロス・ホルダーに布を掛けた。
「出撃の方法は……少し荒っぽくなるが、仕方ないだろう。」
そう言うと、ドーバーライフルを構え、ハッチを吹き飛ばし、背部の大型バーニアを吹かし、飛び上がった。しかし、驚くべきはそのスピードだ。
「ぐっ、何と言う出力、たしかに、相当なじゃじゃ馬だな……何と言うプレゼントだ。コーラル。」
フットペダルを小刻みに動かし移動する。
「しかしたとえじゃじゃ馬だとしても、乗りこなして見せるさ。このシグルドリーヴァを!!」
そう言い、フットペダルを操る足に力を込めた。

『へぇ、あのクランクに、シグルドリーヴァを与えたのか。』
「はい。独断での勝手な行動、申し訳ありません。」
コーラルは、通信機からの謎の男の声に、頭を下げた。
『いや、ボクには支障が無いけれどねぇ、いいのかい？コーラル、アレは元々君の頼みでそっちに送った品だけど。』
「いえ、いいのです。上手く運べば、例の組織に鹵獲されるはずです。その後は。」
『フフフ、いくら『先見の赤星』と言えども、その後は分からないか。』
「……お止め下さい。その名は……、過去の物です。」
コーラルは、少し暗い表情で、男の茶化しを流した。
『そうかい。まぁ良いさ。それに、上手く成長してくれれば、奴らへの切り札に成長してくれるかもしれないよ。』
「そこまでは……、私にも。」
『いいんだ。これはボクの予感さ。』
男はそう言った。
「予感……ですか。」
『ああ、それより、他にも用件があるんだろうねぇ。』

「ええ、実はつい先ほど、タレこみがありまして、」
『タレこみ？』
「はい。トド・ミルコネンと名乗る男から。」
『へぇ、どんなだい？』
　男がそう聞くと、
「『二週間以内にクーデリア・藍那・バーンスタインが件の組織と共に宇宙へ上がる。
　そうしたら、クーデリアの身柄を引き渡すから、自分の事は助けてくれ。』という。」
『おや？例の組織は一枚岩じゃないのかい？君の見立てでは、』
「はい、実力のない無能な大人たちはそのうちクーデターで死ぬ。そして、阿頼耶識を持つ子供らの組織となるというのが見た手ですが、」
『同時に、経営の仕方が分からないから、何人かの大人たちを生かすだろう。というものだったね。しかし、やり方に関しては分かれた。』
「はい。私は自分にとって信頼できるものを置くだろうと言いましたし、」
『ボクは恐怖で押さえつけると予想した。ボクの見立てなら。立場逆転した大人たちは、こんなことできる度胸は無いと思うよ。』
　そう言った。
「なら、信頼できるものが、」
『そんな中途半端な奴を、彼らは選ばないさ。ウィリアムもそうだっただろう？』
「おいおい、俺の事を引き合いに出さないでもらえます？」
　男がウィリアムを引き合いに出すと、壁にもたれ掛って話を聞いていたウィリアムが口を挟んだ。
『そうだね……。なら、見に行ってみると言い。』
「は？」
　コーラルが素頓狂な声を上げた。
『聞こえていなかったのかい？頃合いを見て、会いに行ってみると言いよ。何時、とは言わないけどね。』
　フフフ、と静かに笑いながらそう言った。

『タレこみの事に関しては、ロトス・ケーオを頼ってみるさ。彼らなら、案内人としては最適だからねぇ。』
　さらに、
『後の事は、ボクに任せてくれ。期待しててくれていいよ。』
　と続けて言うと、通信が切れた。
「……で、どうするの？コーラル。」
　相変わらずの軽口を叩くウィリアムに、コーラルは「本部長を付けろ。」と一言疲れたように言ってから。
「今は監査官たちが来るのを待つ他あるまい。それに、クーデリアの件は動かなければならない。
　お前にも出てもらうぞウィリアム。グラシャラボラスの準備をしておけ。」
　と言うとウィリアムは、笑って、
「了解。待ってました。」
　そう言うと、本部長室を出て行こうとした。
「待て、ウィリアム。」
　しかし、すかさずコーラルが呼びとめる。
「手は抜けよ。船は壊すな。敵も壊すな。誰も殺すな。いいな？」
「えー。一人くらいいいじゃん。」
「駄目だ。」
「せっかくガンダム相手に出来るのに。」
「駄目と言ったら駄目だ。」
「ケチ。」
「何とでも言え。」
　取りつく島もないと分かったウィリアムは
「ちぇ。まぁ良いや。今度ガンダム・フレーム持ちの海賊でもいたら教えてよ。そいつらならいいでしょ？」
「そんなお前にばっかり都合のいい輩いるか。」
「俺を拾ったのもそこだったろ？忘れたとは言わせないよ。」
「……。ああ。分かっている。」
　それだけ聞くと、ウィリアムは部屋を出て行った。

本部長室を出て行った彼は、ＭＳデッキに行きついた。
そして、奥にある、一台のＭＳの肩に座った。そのＭＳはグレイズではない。
頭部のブレードアンテナとツインアイは、ガンダムフレームの証だった。後ろには、白銀の鮮やかな尻尾が付いている。
両腕は鍵爪の様になっており、武装の類は一切ない。
「次の任務は楽しめそうにないや、相棒。」
その機体に、ウィリアムは話しかける。
「たまには派手に暴れたいよねぇ。このところ手加減ばっか。」
と、不満をぶーたれるウィリアム。
「でもさ、ガンダム・フレーム持ちの海賊いたら、僕にくれるって、でてくるまで楽しみにしていようぜ。ねぇ、グラシャラボラス。」
グラシャラボラスと呼ばれた機体は、何もしゃべらない。ただ、鎮座しているだけだったが、それでも彼は、何か感じ取ったように細く笑んでいた。

一方、木星兼のデブリ帯。そこを、一機のＭＳが飛んでいた。オレンジと白のカラーリングで、両手にライフル、
背部にもキャノン砲のようなものがあり、脚部はブースターだ。
コクピットの中にいるのは、奇妙なパイロットスーツの少年だった。
彼のどこが奇妙なのかというと、パイロットスーツの上から茶虎の猫耳フードの付いた黒いマントを羽織っているのだ。
さらに、灰色のハイネックのインナーを伸ばし、口元を覆っている。
手の傍には、猫の手の様な大きなグローブも置いてある。
しかし、背丈は低く、年齢は十代になったばかりの様に感じる。

コクピットの傍には、大きな猫の顔の人形が、スタンドに収まっている。
「ふぅ。もうすぐ哨戒も終わりワン。このところ平和ニャン。帰ったらゴロゴロするとするワン。」
と、犬なのか猫なのか分からない喋り方をしながら、辺りを警戒する。すると、機体のコクピットに通信が入った。
「ん？母艦から通信だニャン。何かあったワン？」
そう言いながら、通信を開く。すると、そこに映ったのは、黒髪のパンク風のメイクをした女性だった。
「あ、レコ姉ちゃん!!何かあったニャン？」
少年がそう言うと、レコと呼ばれた女性は、
『おう。それがな、ボスのヤロー、どうも無茶な任務を引き受けたみたいでな。』
と、腕を組み、困った顔でそう言った。
「無茶な任務ワン？全くボスも困った奴ニャン。で、どんな任務ワン？」
『それがな、どうも5日以内に火星まで行きたいそうなんだ。』
「火星ニャン？でも今ボクらって……。」
『ああ、木星圏だ。こっからじゃどう見積もっても一週間はかかる。』
「確かにむちゃくちゃだワン!!」
少年が突っ込む。
『だろ？で、頼みがあるんだ。お前のアミーなら五日以内に行けるだろ？』
「一週間の連続飛行が出来る分の酸素はあるニャン。でも、食料と水が無いから一旦取りに戻るワン。
トイレもあるから自動運転モードにすれば大丈夫だニャン。問題ないワン!!」
顔を輝かせそう言うと、
『おう。カンナに伝えとくよ。』
レコはそう言うと通信を切った。すると少年は、ため息を付き、
「ゴロゴロしたいとか言った矢先がこれニャン。こんなんなら言わな

きゃよかったワン。」
と言い、
「まぁ起きたことはしょうが無いニャン。母艦に帰るワン。ニャーちゃん、サポート頼むニャン。」
そう言って人形の方に顔を向けると、ニャーちゃんと呼ばれた人形は、
『リョウカイ、リョウカイ。』
と電子音を立てた。
「ギン・イブシ、ガンダム・アミー。母艦に帰還するニャン。」
そう言うと、ガンダム・アミーは飛行機のような姿に変形し、飛び去って行った。

第五話　黄昏の果し合い

見事にギャラルホルンを退けたＣＧＳ。しかし、囮にされたなってくれた優しい優しい一軍の方は、多数の死者が出た。
一方で、ソンネンの薫陶を受けた参番組は、被害も少なく、死者０名と言う奇跡的な大金星だ。
そしてその夜、
「はい、それじゃぁこのお鍋を、」
と、ビスケットが鍋を置く。そして彼の妹の双子、クッキーとクラッカに、
「皆に取り分けて。」
「「はーい!!」」
そう言うと双子はきびきびと仕事をする。
この日は、ふもとの店の三日月に絶賛片想い中の少女、アトラ・ミクスタも来ている。
みんなで食事を配る一方でビスケットは鍋を渡すと、一軍に【料理】を運びに行っていた。

「どうぞ。」
そう言うと、一軍隊長のハエダに、スープを渡す。しかし、
「オイ、」
「はい？」
「具がすくねぇぞ!!テメェのダボついたケツの肉でも入れと……け!!」
「うわぁ!!」
そう怒鳴りつけられ、蹴りつけられた。
「よ、相変わらず災難だな。」
すると、追い出されたビスケットに、イオが話しかけて来た。
「あ、イオさん。」

「一軍に対するご奉仕も、もう飽き飽きだよなァ。こっちも見てるだけで嫌だぜ。」
　そう愚痴る。
「えっと、」
「俺もダリルも、ソンネンって奴も睨み効かせてるが、俺達だけじゃ人手不足だ。悪いな。」
　そう言って、奇策に微笑みかける。
「えっと、あの、食べますか？」
　そう言って、スープの入った皿を差し出すが、
「いやいいぜ。そこまで腹減ってねぇんだよな。妙だよな。久々の交戦（セッション）だったってのに。」
　そう言い、壁に寄り掛かる。
「せ？」
「戦いだ。俺はそう呼んでる。」
「はぁ……。あ、そう言えば？」
「あ？」
　すると、今度はビスケットが話題を振った。
「イオさんとダリルさんって、ここに来る前はどういった関係だったんですか？
　ＭＷでも、この間の戦いでも、息ぴったりだったじゃないですか。」
　ビスケットがそう言うと、
「ああ、アイツと、か。聞きたい？」
　手元のＭＰ３プレーヤーを弄くりながら、そう聞く。
「ええ、少し、気になりますから。」
「俺達は、ライバルさ。」
「ライバル？」
「ああ、戦場じゃ、幾度となく殺り合って来た。今仲間なのは、成り行きだな。」
「え？で、でも何で、と言うかそれって息会わないんじゃ……。」
「さっきも言ったがただの成り行きだよ。俺達は同類なんだ。」
「同類？」

「戦いの被害者であり、加害者、戦争を嫌いながら、戦争に魅入られて行く狂人。そして、幾度となく、俺とダリルは殺り合って来た。
アイツの実力は俺が一番よく知ってる。だからこそ、その辺の味方より安心して、背中を任せられるのさ。」
そう言い、シガレットバーを一本加えた。
「仲、いいんですね。」
「アァ？んなワケねーだろ。」
第一音楽の趣味がイマイチだからな。と、愚痴をこぼす、
「アハハ、そうなんですかね～。」
そもそも戦場で音楽を聴くことこそどうなんだ。そう思ったビスケットだったが、もちろん一切口には出していない。
「とまぁ、そろそろじゃね？」
「え？」
「クスリが効いてくる時間帯だよ。」
「え!?どうして僕たちが食事に睡眠薬仕込んでることを……。あっ!!」
うっかり自白してしまうビスケットへぇ、やっぱり。と、イオはニヤリと笑った。
「まぁ良いよ。」
「へ？」
「そもそもあいつら気に入らなかったし？無能だし？クーデター賛成～。」
そう言い、手をひらひらふるイオ。
「全く、お前は軽すぎるんだよ。」
そう言って、後ろからやって来たのはダリルだ。
「そこに隠れてる奴、もう一軍は眠ったぞ。随分とキツイの盛ったんだな。」
ダリルが指すと、通路の奥からこっそり二人の会話を盗み聞いていたユージンとシノが出て来た。
「教官おすすめってやつを使ったんだ。」
「俺達に知識なんざある訳ね―からな!!」

とニヤニヤして胸をはって言うと、
「マジかよ、あのヤク中。そんなもん知ってんのかよ。」
「悪かったな。教え子に詳しい奴がいたんだよ。」
イオのつぶやきを、ちょうどやって来たソンネンに聞かれていた。
「で、こいつら、ふん縛ればいいのか？」
とダリルが言うと、
「ああ、頼む。」
と、オルガが、三日月をひきつれてやって来た。
「こいつらには、落とし前を付けさせなきゃんねぇからな。」
と言い、作業に取り掛かった。

そして、クーデターを見事に成功させたオルガ達は、ＣＧＳを乗っ取ることに成功した。
ハエダには落とし前を付けさせ、始末したものの、退職している奴には退職金を払うなど、経営者として、やるべきことをオルガはこなしていた。
しかし、事態は突如急変する。赤い布を肩にかけた、白いＭＳが向かって来たのだ。
オルガは慌てて事務所の外に出ると、少年組のリーダー、タカキ・ウノと、
おやっさんと呼ばれる整備し、ナディ・雪之丞・カッサパが、双眼鏡を覗き込んでいた。
「何なんです？あれ。」
タカキが聞くと、雪之丞は、
「ありゃぁ決闘の合図だな……。」
「決闘だぁ？」
ソンネンが聞き返すと、
「ああ、三百年前の厄災戦の時代は何でもかんでも決闘で決めてたそうなんだが、まさかこの時代にやるバカがいるとは……。」

雪之丞が呟くと。白いＭＳのコクピットから、獅子を連想させる風貌の、いかつい男が出て来た。
『私は、ギャラルホルン火星支部、実動部隊クランク・ゼント!!諸君らに、ＭＳで、一対一での決闘を申し込む!!』
と、拡声器を使って声を上げる。
『私が勝った場合は、クーデリア・藍那・バーンスタインを、速やかに引き渡してもらう!!』
「え？私？」
出て来た深紅のドレスを着た金髪の少女、クーデリアはとっさに聞き返した。
『なお、引き渡しに応じてくれた場合、ここでギャラルホルンとＣＧＳのしがらみは、きれいさっぱり手打ちとしよう。』
「何だそれ？」
「負けてもこっちには何のデメリットも無いぞ？」
ダリルがそう言うと、イオは、何かに気が付いたように、タカキの手から双眼鏡をもぎ取った。そして、
「……やっぱり、そう言う魂胆か。」
「え？罠って事？」
彼のつぶやきに、三日月が反応するが。
「ちげぇよ。」
とだけ言い、オルガに向きなおった。
「社長、あれ、俺に任せてもらえませんか？」
「……大丈夫なのか？」
「ああ。問題ねぇ。手土産に、あのＭＳを持って帰ってきてやるよ。」
「……。」
笑って言うイオを見据えるオルガ、そして、
「分かった。行って来い。」
「おう。必ず帰ってくるぜ。」
とだけ言うと、アトラスガンダムに飛び乗った。
『おーい、クランク、だっけか？その決闘、こっちで受けさせてもらうぜ!!』

「……。感謝。」
イオの返答に、クランクはそう呟いた。そして、ＣＧＳの前で、お互い向き合う。
『ギャラルホルン実動部隊!!クランク・ゼント!!』
「ちｋ……じゃなかった、ＣＧＳ所属、イオ・フレミング!!」
そう名乗ると、ＭＰ３プレーヤーを起動し、軽快なジャズを流す。
『参る!!』
「行くぜ!!」
その言葉と共に、アトラスとシグルドリーヴァのブースターが火を噴く。
アトラスのヒートサーベルと、シグルドリーヴァのシグルブレイドが衝突する。
「パワーは若干こっちが上だ!!押し切る!!」
ブースターを最大側で吹かせ、剣を弾き飛ばそうとする。しかし、
『ぬん!!』
シグルドリーヴァはその瞬間、流れるような動作で剣を流し、背後を取る。
「何ッ!?」
『せいっ!!』
そして、拳の一撃が入る。よろけたアトラスだったが、とっさに体制を持ち直す。
「あの腕前とセンス、エースパイロット並みかよ……!!」
そのままブースターを吹かし、距離を取る。すると、
『まだまだぁ!!』
シグルドリーヴァもスラスターを吹かして追従する。その手には、グレイズライフルが握られている。
しかし、アトラスは放たれた弾丸を巧みにかわす。
「そっちがその気なら……。」
アトラスも、アサルトライフルを構える。
「こうだ!!」
照準を合わせ、アサルトライフルを撃つ。しかし、急制動を駆使し

たカクカクした軌道に付いていけない。
「相手が早すぎる!!」
「照準システムが追いついていない……!!この速さ……当然か。」
そう、アトラス、シグルドリーヴァ、お互いに推力に物を言わせた機動戦が重視となっている。
とてつもないスピードで駆け回ってる機体の照準補正は、とてつもなく難しい、そのうえ、相手も同じとなると、システムだけではカバーしきれない。
「けどよ……!!」
「しかし……!!」
イオもクランクも、一流のパイロット。その動きは当然の如く洗練されている。その動きで、ライフルを当てて行く。
しかし、お互いがお互いの銃撃をシールドで受け、どちらも無傷だ。
「射撃じゃらちが明かない……。なら!!」
『接近戦で!!』
再びサーベルをぶつけ合わせ、離脱し、またぶつけ合わせる。地面すれすれを飛び、上空を飛び、剣をぶつけ合う。
「オラァッ!!」
『ゼアァッ!!』
渾身の一撃。そして、
キィン!!
と音が響き、アトラスのサーベルが宙をまった。
『終わりだ!!』
返す刀でシグルブレイドを振り抜こうとするシグルドリーヴァ。
しかし、
「誰が……。」
アトラスのバーニアが火を噴く。
「終わりだって!?」
一回転、バク中の要領で機体を蹴りつけた。その衝撃で機体がふらつく。
更に、その際に両足にスラスターを付け、飛び上がる。そのままも

う一本のヒートサーベルを抜き放ち。
「オラァッ!!」
飛び降りざまに唐竹割り。とっさに防ぐクランクだが、
再びアトラスの右足がシグルドリーヴァを蹴りつけ、今度はシグルブレイドが宙を飛んだ。
そしてそのまま、体勢を崩したシグルドリーヴァを押さえつけた。
「ハァッ、ハァッ、ハァッ、俺の……、勝ちだ……!!」
イオはコクピットの中で、ニヤリと笑んだ。
「負けたのか……私は……。」
クランクは一人、呟くと、コクピットを開けた。
「投降する。私の身柄は、好きに扱うと言い。」
そう言い、両手を挙げた。

宇宙の戦い

決闘から帰って来たイオがオルガから手厚い歓迎を受けた。
「アンタ、すげぇな。目で追えなかったぜ。」
「ま、アトラスの機動性は折り紙付きだからな。」
そう言い、イオが胸を張る。
「それに、あの機体をほぼほぼ無傷で持ち帰ってくれるのは助かったぜ。これで鉄華団の経営も楽になる。」
「テッカダン？」
イオが首をひねると、
「新しい名前だ。ＣＧＳなんてカビ臭い名前を名乗るのは、しゃくにさわるからな。」
オルガがそう言う。
「テッカ……鉄の火か？」
煙草に火をつけ、オルガに問いかけると
「いや、鉄の華だ。」
「花？」
「ああ。決して枯れる事のない鉄の華。それが俺達、鉄華団だ。」
「へぇ、いいな。カッコいいじゃねぇか。文句なし、百点の名前だな。」
イオがそう言うと、
「団長の付けた名前に百点って、何様のつもりだお前は……。ま、お前らしくもあるが、」
と、ダリルが言う。
「それで、これからどうするんだ？団長。」
イオが聞くと、
「ああ、それはだな……。」
と、これからの経緯を話した。

経緯をざっくり説明すると、

現在、ＣＧＳもとい鉄華団はギャラルホルンに堂々と喧嘩売っているため、新規の事業を立ち上げることは不可能。
これは、捕虜になったクランクもそう言っている。現在は脱退し、死亡扱いになっているため、一度死んだ身として協力してくれるとも言っていた。
そのため、現在引き受けている、クーデリアの地球送りに協力することになった。その為、宇宙へ出向くことに、
しかし、ギャラルホルンの正規ルートは使えない。その為、何処かの商会に道案内を頼むことになったのだが、
残った大人組の一人、長いものには巻かれるタイプの男、トドの幼馴染がやっているという、
トド曰く安心と信頼のオルクス商会頼ることに。

そして、その当日、ソンネンとダリルは、ヒューマンデブリと言う、金で売買される類の人間だった者達、
そのリーダー格の、昭弘・アルトランドと、チャド・チャダーン。そして、システム周り担当のダンテ・モグロ、
ＣＧＳ時代からの経理担当、デクスター・キュラスターと共に、一足先に空へ上がり、マルバの所有していた戦艦、
強襲装甲艦『ウィルオー・ザ・ウィスプ号』と、ＭＳ輸送艦『リバー・クイーン号』改め、『イサリビ』と『ホタルビ』
の名義変更のため、静止軌道ステーションに上がっていた。
そのため、二台のシャトルには残りの地球活きメンバーそして、鉄華団で雇ってもらう事になった給仕係、
三日月の彼女、アトラ・ミクスタで、宇宙へ上がることになっていた。
ちなみに、アトラが入団した時、イオが盛大に囃し立て、アトラは顔から火が出そうなほど顔が赤くなっていたのは余談である。

そして、宇宙に上がる。
「へぇ、これが火星ねぇ。」
オルガの頭脳とも言っていい、参謀役のビスケットが取り仕切る二号艇では、宇宙から見る火星に、イオが驚いていた。
「うお!!マジだ!!カッケェ!!」
少年組も、窓にへばり付き、火星を眺める。その中に、成人しているイオがいるのは、中々にシュールである。
すると、外を見ていたソンネンが、
「おい、オルクスの船が見えるぞ。」
と、反対側の窓を見て行った。
「え?予定まで、まだだいぶ時間がありますが……、」
ビスケットがそんな言葉を言うと、イオは、急に窓から顔を離し、ポケットに手を突っ込んだまま、後ろへと歩いていく。
「アレ?イオさん何処に?」
「ア?小便だよ。」
そう言うと、扉を開けて、歩いて行った。
すると、
「光った。推進剤の光だ。」
「え?ホントだ。って、」
ビスケットたちが見たのは、ギャラルホルンのグレイズが六機と、色の違う機体が一機、向かってくるところだった。
「ギャラルホルンのモビルスーツ!?」
実はこれはトドの密告のせいでこうなっていたのだが、こちらで走る由もない。一方でもう一方の船はと言うと、

トド・ミルコネンへ我々への協力に感謝する。
と言う通信が入って来たところだった。

「おい、協力ってのは、どういう了見だ？」
そこには、ニコニコと怖い笑みを浮かべたユージンとシノが、
ヒッ、と、トドは短い悲鳴を上げてから、タコ殴りの刑に処された。

一方二つの船には一機ずつグレイズがワイヤーを放ち、連絡を入れていた。
『クーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を差し出せ。』
そう、連絡が入って来た。すると、クーデリアが、
「私を差し出してください。」
と、躊躇なく言うが、
「いや、それは無しだ。」
そう言うと、通信機のスイッチを入れた。
「ミカ、そっちの準備はいいか？行くぞ。」
そう言い、鉄華団のロゴを入れたジャージのポケットに入れていたボタンのスイッチを押した。
「三日月？そう言えば……三日月がいない!!」
彼氏がいない事に今更ながら気が付いた彼女であった。

一方二号艇でも、
「イオさん、準備は？行きますよ!!」
ビスケットがそう言い、同じくスイッチを押した。

その瞬間。大量のスモークと共にシャトルの格納庫が開かれた。
二機のグレイズはバイザーを開き、メインカメラをむき出しにして

中を見ようとするが、その瞬間、
一号艇に取りついていた奴には滑空砲が、二号艇に取りついていた機体にはレールガンが突き付けられた。
「何ッ!?」
「馬鹿な……!!」
二機が驚いている間に引き金が引かれ、機体が吹き飛んだ。
「ヘッ、ざまぁ無いぜ。」
パイロットスーツを身に着けたイオが、そう言う。二号艇にはアトラスガンダムが、一号艇にはバルバトスが控えていたのだ。
『イオ、で、どうするの?』
三日月が通信を入れる。
「ア?簡単だろ。こいつら全員、潰しゃぁ良いんだよ。」
『そうだね。分かった。』
「そこにためらいなくはいって言えるあたり、お前すげぇよ。」
そう言うと、盾を構え、飛び上がった。
バルバトスもそれに追従するように、滑空砲を構えて飛び上がる。

MS部隊がつられている中、ウィリアムは、
「俺も出るよ?コーラル。いいよね?」
コーラルにそう問いかけていた。
「ああ。だが、」
「分かってる。死なない程度に加減するさ。」
そう言うと、コクピットのレバーを握った。
その背には、阿頼耶識が、
「ウィリアム・ニルバー。ガンダム・グラシャラボラス、楽しんでくるよ。」

一方ＭＳ部隊が二機のＭＳに釣られて行ったのをオペレーターから聞いたオルクスは、
「よし、コーラルに恩を売るいい機会だな。よし、お前ら、あのシャトル二台を撃ち落とせ!!!」
と、命令する。
艦砲を一斉にシャトルに向けると。
「引導を渡してｙ」
と言いかけた所で、いきなり頭上から衝撃が訪れた。
「な、何だ!?」
その瞬間、二隻の戦艦と、その中央に陣取る、赤いＭＳが降りて来た。
背後には武装が山積みの大型ブースター、ガンダムタイプのツインアイとも、グレイズ系統のカメラ・アイとも違うモノアイ、
その盾には、『ＳＵＶＹＶＯＲ　Ｄ．Ｌ』の文字、そして、コクピットに流れるオールディーズ。
「迎えに来たぞ。大将。」
サイコ・ザクのパイロット、ダリル・ローレンツはそう言って、ニヤリと笑った。
「時間通り、いい仕事だぜ、ダリル。」
一方オルガも、それを見て、ニヤリと笑った。

そして、シャトルを搬入させ、ブリッジに出るオルガ。
「状況は?」
周りのメンバーに聞くと、シノに抑えられた痣と青タンだらけのトドが、
「おい!!何でその船がここにいやがる!?静止軌道で合流のはずだろ!!」
と怒鳴るが、
「今までお前が、信用にたる働きをしたことがあるか?」

と一言。
「ゆ、許さねぇぞお前!!」
「それはこっちのセリフだ馬鹿野郎!!」
「ウグッ。」
と、トドの顔面にもう一発拳がめり込む。
「倉庫にでもぶち込んどけ!!」
オルガの止めの一言。トドは、連れ去られて行った。

「団長、俺は二隻の直衛に付く。いいよな?」
「ああ、問題ねえ。けどよ、二隻を守りながら、アレをさばききれるのか?」
そこには、十機程のグレイズが向かってきていた。
「問題ない。」
そう言うと、片手にロングレンジライフルを構え、二本のサブアームにジャイアント・バズとザク・バズーカを持たせる。
そして、向かってくるグレイズの一機を捉えた。
「ロックオン。」
そう言うと、グレイズにライフルを一撃。しかし、MSのナノラミネートアーマーを、ライフルの弾丸では貫けない。
しかし、ダリルは急所を狙わなかった。体勢を崩し、そこにバズーカを放つ。
機体が吹き飛ぶとはいかない前も、損傷が広がったグレイズは退却した。
「行くぞ、サイコ・ザク!!」
そう言うと、飛び上がった。

「オラオラどうした!!テメェ等その程度かよ!!」

ジャズが鳴り響く中、アトラスガンダムはすでに十機のグレイズを葬って来た。
「何だあの機体!?エイハヴ・ウェーブが無い!?」
「落ち着け!!見えてることは変わらない!!落ち着いて囲んで……ぎゃあ!!」
再び吹き飛ばされる敵機。すると、
「お前らは下がれ!!俺が何とかする!!」
と、ウィリアムとグラシャラボラスが現れた。
「ウィリアム一尉!!お前ら撤退だ!!巻き込まれたく無ければな!!」
グレイズ部隊を指揮していた隊長がそう言い、次々と機体が逃げて行く。
「お前……エースか?」
イオが問いかけると、
「ご名答。ウィリアム・ニルバーだ。覚えとけよ。」
そう言う。
「イオ・フレミングだ。」
「律儀に名乗ってくれるのかよ。ただ、」
シャラァッ、と背後にあった長く鋭利な尻尾から、棘の様な物が出現した。
「ッ!?」
咄嗟にイオが盾を構える。すると、身体をひねって飛ばされた棘が、イオに向かって飛んできた。
「何だそのピーキー過ぎる武装!?」
そう言いながら盾で失せぐと、六本ほどの針が盾に突き刺さった。
「冗談だろ!?」
「生憎現実だよ!!」
今度はアトラスに飛び掛かり、イオが防御の為に突きだした盾を殴り、蹴りつける。
「ぐ、クソッ、」
「ほらほら、せっかくだし、もっと楽しませてくれよ!!」
「うるせぇ、ハンデだ!!」

そう言うと、イオはバーニアを吹かせた。

次々とグレイズを葬っていた三日月とバルバトス。しかし、上に、意匠の違う機体が居る事に気が付いた。
グレイズとは違う形のバイザー、バックパックなどいたるところに増設されたバーニア、そして、右腕のランス。
三日月は知る由もないが、機動性重視型のグレイズの上位互換、シュヴァルヴェ・グレイズだ。
「全く、火星の奴らは無能だらけか？すでにグレイズを六機……見てくれよりは、出来る様だな!!」
そう言うと、突撃していった。
「ああ、無茶すんなって言ってんのに、まぁ、いいか。」
そう言うノエル。彼の乗るグレイズ・リッター先行量産型は、
「おっすガエリオ、加勢してやるぞ～。」
そう言うと、鎌を構えて向かって行った。

「ガエリオ達は、あっちに食いついたか。」
モニターを見ながら、ガンダム・ラームのコクピットで、リーヴァルはそう呟いた。
「じゃぁ僕は、あの赤いのに食いつくとしよう。」
そう言うと、リーヴァルはサイコ・ザクへと飛翔した。
「ッ!?新手か⁉」
ダリルは武装を構える。
「君の実力、見せてもらうよ!!」
そう言うと、リーヴァルも両手で二丁拳銃を構えた。

一方オルクスは、
「よし、あの赤いのが船から離れた!!」
そう言い、戦艦の速度を上げた。
「今度こそ!!引導をわたしてｙ」
再び、言おうとした瞬間、船に衝撃が訪れた。
「またか!!今度は何だ!?」
オルクスが怒鳴ると、そこに飛んできたのはＭＡ形態のアミーだった。

「全く、何でボクの相手はあのハゲデブワン?ウィリアム君と戦いたかったニャン。」
そう言いながら、オルクスの船に、ミサイルを十数発撃ったギンは、オルクスの船へ飛翔した。

エースＶＳエース

ガァン!!
凄まじい音がして、アトラスのサーベルとグラシャラボラスの拳がぶつかり合う。
「ヒート平気で焼き切れないたぁ、何か絡繰りがあるな？」
『それを教えるほど、優しくは無いさ!!』
繰り出される蹴りをギリギリで回避し、左手のシールドをしまい、ヒートサーベルの抜き打ちを放つ。
しかし、それは剣のように細く、鞭のようにしなやかな尻尾に阻まれた。
『惜しかったね。』
「ま、楽には行かねぇか!!」
跳んできた拳を躱し、飛翔する。
『肉弾戦特化のグラシャラボラス。戦法を一撃離脱に切り替えたか。レールガンは、いくら出力が高いからとって、当たらなけりゃどうってことはないからね。』
アトラスに追従するように、グラシャラボラスをウィリアムは飛翔させる。
ガァン!!ガァン!!ガァン!!
並ぶように飛行し、けりを、拳を、尻尾を繰り出す彼、対抗するように二刀を繰り出すイオ、
交差しながら、武器がぶつかり合う音がヘルメットから聞こえてくる。機体に来る振動を、スピーカーが音として拾っているのだ。
咄嗟に飛ばされた尻尾の棘を上昇して回避し、お返しと言わんばかりにレールガンを放つ。
それを回避したウィリアムは接近する。
イオも同様に接近し、ウィリアムの蹴りを盾を投げて弾く。
「これで終わりだ!!」
『何のォ!!』
しかし、振り下ろされた剣は、グラシャラボラスの左腕に切り込み

を入れただけに留まった。
『……へぇ。これは少し、』
切り込みの入った腕を見たウィリアムは、細く笑んだ。
『予想外だったよ。まさか、ここまでやるとはね、』
そう言い、コクピットのボタンを操作する。
すると、グラシャラボラスのツインアイが煌いた。
【ＭＡＳＳＡＣＲＥ　ＭＯＤＥ　ＭＡＮＥＵＶＥＲＩＮＧ】
「ッ……こいつは……。」
その瞬間、コクピットから出る気配が変わった、今までの、互角な戦いを楽しむ少年の気配ではない。
獲物を狩る、捕食者の気配。
イオは、かつてダリルが、己の機体にビッグ・ガンをロックして、放った時と同じ、『死』のイメージを感じた。
『遊びはヤメだ。こっからは、一方的な殺戮だ!!』
目を開き、瞳孔を点のように小さくしたウィリアムはそう叫び、ブースターを吹かそうとした時だった。
『ウィリアム!!』
コーラルの声がしたのだ。
『コーラル!?何、今イイトコ……。』
『オルクスの船が墜ちた、時間切れだ。』
コーラルの連絡に、ウィリアムは初めて、心の底から驚いたような顔をした。
カメラをオルクスの船の方向に向けると、煙を吹き、各所はダメージがひどい。何より、ブリッジの姿が、無かった。
『はぁ⁉だって、シグルドリーヴァはノエルが……。』
『いや、援軍だ。』
その言葉を聞き、ウィリアムは全てを理解した。
『……ああ、ナルホド。』
そう言うと、起動していたプログラムを切った。
『時間切れみたい、またね、おかしなガンダム・フレームのお兄さん。』
そう言うと、ウィリアムは飛び去って行った。

「なんだったんだ？それより、シグルドリーヴァ？クランクのおっさんの所在は、ばれてたのか？ギャラルホルンは何でそれを放って……」
雷がビームを曲げたように、また運に助けられたイオは、そう呟いていると、戦闘機型のＭＳが二機、飛んできた。
片方は支援を重視した支援ＭＳで、大型のロングライフルを装備している。もう一機は通常のライフル、バランスのとれた装備をしている。
『あ～、もしもし、無事ですか？』
バランス型の機体から声が駆けられる。
『ランマル……機体に大した損傷もないし、無事に決まってんでしょ？』
しかし、イオの安否を心配して放たれた一言は、支援型の機体の辛辣な一言に阻まれた。
「あ、アンタらは？ギャラルホルンじゃ、なさそうだな。」
イオがそう言うと、
『え？ああ、アタシらはヘブンズ・ナイツ・ブリケード。『お得意様』に頼まれて、支援に来たの。』
と、支援型から、少女の声がそう告げた。

一方、少し離れた所から、監査局の船で戦いを眺めていたマクギリスは部下に、
「敵の機体の正体は分かるか？」
と聞いていた。するとオペレーターは
「少し距離がありますが……エイハヴ・ウェーブの拾える機体のウェーブは、拾っています。」
「拾える機体？どういう事だ？」
マクギリスがいぶかしみ、オペレーターに聞くと、
「それが、あの赤い機体と火星でも暴れていた機体、あれからはエイハ

ヴ・ウェーブの反応がしないのです。」
という、驚きの答えが帰って来た。ＭＳの動力源は、エイハヴ・リアクターだ。エイハヴ・ウェーブはどんなエイハヴ・リアクターでも発する。
つまり、エイハヴ・ウェーブの無いＭＳなど、ありえないのである。
「何だと？ジャミングでもしているのか？」
咄嗟にそう問いかけるが、
「いえ……どちらの機体も、ウィリアム一尉と、リーヴァル特務三佐が敵対しています。あの二人相手に、そう言った装置は重荷になるので、外さないと言うのは……。」
二人は若いが、歴戦のＭＳパイロット。あの二人はイオ、ダリルと一流の射撃戦、格闘戦を繰り広げていたのだから、エネルギーを食ったり、外装式のジャミング装置は重荷だ。
そう言う特性のある機体かと言うのは、恐らく違うだろう。そんな機体が二つも都合よく少年兵たちのある組織にある訳が無い。
実はこの二機はエイハヴ・リアクターではなく、過去のロスト・テクノロジーとも言える、核融合炉を使っていたのだが、彼らが知る由もない。
「確かにな……どういう事だ？」
前髪を弄りながら、マクギリスは考える。
「まぁいい。残りの機体は？」
しかし、考えが分からず、オペレーターに問いかけた。
「ハッ、ガエリオ特務三佐と交戦している機体の個体コードはバルバトス。
古いですね、３００年前、厄災戦を終わらせたガンダム・フレームですよ？」
そう言うと、
「いや、必然かもしれないな。」
「は？」
そう言い立ち上がったマクギリスに、オペレーターはいぶかしげな目を向けている。

「それで、続きは？」
「ハッ、ノエル特務一尉と戦っているのはシグルドリーヴァ……ヴァルキュリア・フレームですよ。
　ガンダムよりある意味絶滅危惧種です。ＣＧＳと言うのは、博物館でも開くつもりだったのでしょうか？」
「分からんな。残りは？」
「あのいきなり現れた戦闘機のような機体は……出ませんね。厄災戦時代にデータが失われてしまったクチでしょうか。」
「そのようだな。となれば、あの機体も随分と古いか。」
「はい……。」
　何故そんな骨董品ばかりが……そう二人は考える。
「考えていても仕方ないか。私もでる。船は任せるぞ。」
「「ハッ!!」」
　マクギリスの指示に、残った船員たちはいっせいに敬礼をした。

　サカリビの、カタパルト式の発着台に、クランクの駆るシグルドリーヴァは立っていた。
『カタパルト、ロック!!タイミングをクランクさんにジョウトします!!』
　そう言うのは、ダンジ・ロックマン。この船ではオペレーターを手伝っている。
「ああ。分かった。」
　腕を組んでいたクランクは、そう言うと、ブースターを吹かす。
「（一度死んだ身として、おこがましいと分かっていながらも、ここで戦う道を選んだ。だとしたら、やるべきことは一つだ。
　この命尽きるまで、彼らは誰一人死なせない。その為に、戦う!!」
　そんな事を考え、ブースターの速度を上昇させた。
「クランク・ゼント!!シグルドリーヴァで出撃する!!」

カタパルトから出撃したクランク。その姿を見ている者がいた。ノエルだ。
「へぇ、シグルドリーヴァ、ギャラルホルンから強奪された機体……か。いいじゃん。その力、ためさせろよ!!」
グレイズ・リッターの鎌を構え、クランクに斬りかかる。
『くおっ!!』
歴戦の戦士の勘でそれを感じ取ったクランクは、とっさにヒート・サーベルで鎌を防ぐ。
「おっ、ヒート兵器か。まぁ、この鎌には効かねぇけど!!」
『貴様は……』
「トト・ノエル、そう言うテメーは、クランク・ゼントだろ?」
『ッ!!』
自分の名前を当てられたことで、クランクは動揺する。
「アハッ、アタリみたいだね~。安心しな。他の奴に言いふらす気はねぇよ。」
そう言うと、ノエルは専用のリボルバーを引き抜く。
「そらっ!!」
そのリボルバーを放つが、クランクのシグルドリーヴァには、立った一発かすっただけだった。
しかし、かすった部分の脚部装甲は大きくえぐり取られた。
『何ッ!!』
「結合阻害弾。ナノラミネート・アーマーは、ナノラミネート・コートとエイハヴ・リアクターが生み出すエイハヴ粒子が結合することによって成立するんだぜ?
このリボルバーの特殊機構が特殊金属の弾丸と化学反応を起こして、その結合を阻害する。とり回しに難があるが、このマグナム、結構気に入ってんだぜ?」
そう言い、これ見よがしに見せつけるノエル。
「テメーには何の恨みもねぇが、行くぜ!!食らえ骨董品!!現代科学の

結晶だぁ!!」
楽しそうに眼を開き、リボルバーを放つ。クランクはそれを全力で飛び回り、躱し続ける。右に回転しながらドーバーガンを乱射する。
三発のおのれに向かってくるバズーカ弾を全弾一発で打ち落とし、さらに一発放つ。
『(あと一歩で弾切れ。そこを突く!!)』
そう考えながら、クランクはブラフの突撃を行う。
ノエルはそれに対し、残った一発を放った。
『今だ!!』
それを躱し、剣を抜き放つ。
それをノエルは、鎌で受け流した。サブアームが展開され、左腕のリボルバーは、一発ずつ装填されていく。
「弾切れを狙うか。いい線言ってるよ、オッサン!!」
『生憎、若造に負ける気は毛頭ない!!』
機体出力に物を言わせ、鎌を弾く。ノエルも、0距離でリボルバーを放つ。それは左の肩口に命中した。
『クッ、だが!!』
しかし、リボルバーを持った左腕を切り裂いた。
「チッ、肉を切ったら骨を断たれたか。テメーやるじゃん!!」
しかし、ノエルは片手で鎌を振るう。
「そらぁッ!!」
『中々に、やる!!』
鎌を受け止めるクランク、片腕とは思えない連撃を放ってくる。
「ハァッ!!」
「せいっ!!」
クランクの突きと、ノエルの一閃が交叉する。
ヒートソードはコクピット付近の装甲を抉り、鎌はシグルドリーヴァの頬に傷をつけた。
「ちぇ、痛み分けか。テメーとやり合うのは、中々楽しめたよ。オッサン。」
しかし、同時にオルクスの船が落され、時間切れを悟るノエル。宙

を漂うリボルバーを掴み、放ちながら撤退していった。
『………時間切れ………運に助けられたか。』
　そう呟いたクランクは、イサリビとサカリビの直営に戻ろうと向
かって行った。――――
――――
――――
――

　カタパルトに降りたマクギリスが乗っていたのは、ガエリオと同じ
シュヴァルベ・グレイズ。
　ガエリオのとは違い、バトルアックスを持った機体だ。
「マクギリス・ファリド、シュヴァルベ・グレイズ出るぞ。」
　そして、出撃したマクギリスだったが、
「せぇぇぇぇぇい!!!」
「ッ!!」
　いきなり飛んできたコミックに出てくる宇宙船の様な機体が、前面に出たアームで背後からマクギリス機の両腕を掴んだ。
「何だ!?」
　背部にカメラは無いが、異常を察知したマクギリスはとっさに機体を暴れさせ、敵を振り払った。
　カメラに映ったのは、宇宙船の様な機体。しかし、その機体の上部アーマー部分が開き、スカートアーマーの付いた、マッシブな下半身となった。
　その上に、女性的なフォルムを思わせる、スマートな上半身が現れた。
　その異彩を放つＭＳの右腕は、大きな異形のクローアームで、左腕にはナックルガードの様な武装が付いている。その容姿は異色の一言に尽きた。
「ふぅ、間に合ったぜ。」
　異形のＭＳの主、レコ・ヤブサメは、そう呟き、汗をぬぐった。
『貴様は………奴らの仲間か?』
　警戒したマクギリスはライフルを向けるが、全く焦ることなく、

「ああ、そういう事だな!!」
そう言い、同じ様に猟銃めいた形状のライフルを構えた。
そのライフルから放たれたのは、散弾。比較的近距離にいたマクギリスは、とっさに躱すが、右脚部のブースターが損傷を受ける。
「しまった……!!」
シュヴァルベ・グレイズは、ピーキーな機動性を発揮する機体だ。
しかし、それは各所のブースターが仕事をした場合である。一部のブースターが動かなくなれば、機体バランスがあっという間に崩壊するのだ。
脚に来た一撃を避けられなかったのは、先ほどの不意打ちが、少なからず背部のバーニアに打撃を与えていたからだ。
「悪いが足止めをさせてもらうぜ!!マクギリス・ファリド!!」
「フッ、バーニアの一部を壊した程度で、あまり調子に乗らないでもらおう!!」
そう言いながら、距離を取ってライフルで射撃をするが、全く効かない。
「固いな、あの機体……。」
「ナノラミネート・コートにちょいと絡繰りが施されててなぁ!!」
右腰のホルスターにショットガンをしまい、ナックルガードから細身の刀身が現れる。
「近接戦を仕掛けてくるか!!なら……!!」
マクギリスも、バトルアックスを抜き、あえて接近する。射撃がダメなのはとっくにわかりきっているからだ。
「そらぁ!!」
「フンッ!!」
異形の腕が、斧と交差する。相変わらず、異形の右腕は傷一つ負っていない。しかし、マクギリスにとって、間違いない収穫があった。
「(防いだ!!)」
そう、先ほどのライフルとは違い、防いだのだ。彼女は、それは、コクピットに斧が直撃すればダメージがある証拠だ。
近接戦での攻防を繰り広げ、距離を取る。制御はしづらいが、機動

力ではマクギリスが上だ。しかし、ライフルの射撃は当然の如く弾かれる。
「(やはり射撃戦は意味が無いか。あの固さ、何か絡繰りがあるな。ナノラミネートアーマーの他に、何かがあるか。しかし、それを気にしている場合ではないな……。)」
再度接近する。しかし、やはりスラスターが本調子でなければ、フェイントなどを入れた攻撃は出来ず、どうしても動きが単調になる。
「(弱点は接近戦。しかし、あの右腕、装甲の強度が他より固いと見た。あの細身で、何と言う防御力……)」
「もらったぁ!!」
「ッ!!しまっ……」
右腕がマクギリスの防御をすり抜け、ブースターを破壊する。さらに、剣がしまわれ、機体に突き付けられた左手には、すでにショットガンが、
ガァン!!
咄嗟に機体を動かした、マクギリスは、機体の左腕を犠牲に、命を拾った。
「(左腕をやられたのは痛かったが、そのおかげで機体の左側を取った。ショットガンは構造からみてリロード式。あの腕ではすぐには撃てまい!!)」
しかし、そう思ったのはうかつだった。
斧の一撃をナックルガードの突起で防いだレコの機体は、ショットガンを回転させて、属に言う、ローリングコックリロードで、リロードをしたのだ。
手先の動きが重要なこの技をＭＳで再現してくるとは思わなかったマクギリスは、一瞬、動きを止めてしまった。
「な、に?」
「こいつで!!」
再び放たれた散弾は、マクギリスのグレイズから右脚も奪う。更に、機体を回転させ、異形の右腕が、頭部を掴み、引きちぎった。

「グッ、カメラが……」
「これでこの機体は動けないか。ま、念には念を入れて、」
　再びローリングコックリロードをしたレコは、背後に立ち、蹴りつけて距離を取ると、ブースターに向けてショットガンを……
「止めろおおぉぉぉ!!」
「ッ!?」
「俺の親友に、何をしている貴様!!」
　向かって来たのは、ガエリオのシュヴァルベ。親友の機器を、彼は第六感ともいえる感覚で察知して、三日月との戦闘も放棄し機体を走らせていたのだ。
　咄嗟にレコは右腕で防ぐが、ガエリオのランスが、肩口の装甲を、わずかながらも削った。
「(こいつ、今バウンド・ドッグのマグネットコーティングを削った？この貫通力、厄介だな。)」
　そう思ったが、機体をひねるように動かし、ガエリオの背中に立つ様な体制を取った。
「しまっ!!」
　焦るガエリオ。しかし、レコは、ショットガンで頭部を吹き飛ばすと、
「三日月も回収完了。アタシも母艦に帰還すっかな。」
　そう呟き、撤退していった。
「撤退……した？」
「ああ、そのようだなガエリオ、運に助けられたか。」
「ああ。全くだマクギリス。」
　そう呟く二人。
「おーっす、テメーら元気にしてやがりましたかー？」
　そう言い、モニターに映ったのは、相変わらず、口元をパネルで隠したノエルだ。
「ノエル、貴様が相手取っていた奴はどうした？」
「え？」
　ガエリオの問いかけにいったん固まったノエル。腰元をゴソゴソ

と探り、次にコクピット周りをゴソゴソと、
「えーっと、確かこの編だったはず……、お、あったあった。」
そう呟き、ペロッと舌を出したパネルで、口元を隠す、片目をつぶり、パネルを持っていない方の手をコツンと頭に当て、首を２０。傾ける
「ごっめ～ん。見逃しちゃった～。テヘ。」
「何がテヘ。だ!!この、大馬鹿やろおぉぉぉぉ!!!!」
ギャラルホルンの通信には、ガエリオの怒鳴り声が最大音量で響いた。

アサシン・ホーク

「本当に行くんですか？」
ノーマルスーツを身に纏い、頭にヘルメットの上にプラスチック製のバケツを付けた少女が、前を行く人影に問いかける。
前を行く男は、これからＭＳデッキへ行くと言うのに、ノーマルスーツを着ていない。
白のタキシードにズボン。しかし、服には鉄の留め金が沢山ついており、彼はそれを全て留めている。
裏地は赤で、後ろの方ではひらひらと深紅が見え隠れしていた。
「大丈夫だよ。それに、人では足りなさそうだ。ボクの機体なら間に合うでしょ？」
言動からしてパイロットなのだろう。しかし、黒手袋に革靴、百合のマークの鉄製のエンブレムの付いた帽子は、とてもノーマルスーツには見えない。
「でも、大丈夫なんですか？カンナは心配になります。いっつもノーマルスーツを着て行かないから、」
そう俯いた少女を、彼は正面から見据える。
「問題ないよ。カンナ。アレはボクには窮屈だし、似合わない。それに、スーツの有無にかかわらず、ボクの相棒がいなくなった時、それが僕の死ぬときさ。」
そう言い、ウインクをする。
「でも……でも……。」
「大丈夫、ボクは死なない。そうだろう？」
「……はい。」
「じゃ、行ってくるよ。カンナ。」
「はい……。」
そう言い、彼はドッグにあったＭＳの中で、緑をベースにした機体の中に滑り込んだ。
その機体の風貌は騎士然としており、優雅であるとしか言いようがない。

背には1対の翼を模した黒いパーツがあり、何ともいえない禍々しさは、ガンダム・フレームに違いない。
「ソウさん!!」
彼がコクピットに乗り込む寸前、カンナと呼ばれた少女は声を上げた。
「必ず……、必ず……、帰ってきてくださいね!!」
その声に、彼は振り返ると、優しく微笑んだ。
「勿論だよ。カンナ。」
そして、コクピットに滑り込む。背中の阿頼耶識のコネクタは細く、彼の首筋にある一本のナノマシンに、直接接続した。
余談だが、高い襟も、全く邪魔になっていない。
「さてと、正体不明の赤い機体が忙しそうだな。まぁ、あのアサシン・ホークが相手なら、しょうがないか。」
そう呟くと、機体をカタパルトに接続した。
MSのツインアイが輝く。
「ヒヨリ・ソウ。ガンダム・ヴァッサーゴ。出るよ。」
ヴァッサーゴ（地獄の貴公子）の名を冠する機体が、飛び立った。

リーヴァル・バクラザンは、バクラザン家の長男だ。頭首、ネモ・バクラザンと、その妻カーサ・バクラザンから生まれたと言われているが、その出自は謎が多い。
なびく黒髪はまったく二人に似ず、彼の民族めいたメイクも、何故つけているのか真相はさだかではない。
しかし、初代バクラザン、スーハン・バクラザンより受け継がれてきた暗殺術、
そして、長年行方不明だった機体、ガンダム・ラウムを操る腕は、誰が見ても本物だった。
そして、その実力は、サンダーボルトの悪魔とまで言わしめたダリル・ローレンツにも、十分通用した。

実際、機体を手足のように自在に扱うダリルの腕は馬鹿にならない。
イオのＦＡ・ガンダムがサンダーボルト宙域で渡り合ってきたダリル・ローレンツと言う男は、リユース・Ｐ・デバイスが加わると、狙撃が得意なエースから、領域外の化け物に変貌する。
現に今も、リーヴァルの二丁拳銃をかいくぐり、マシンガンやバズーカで反撃を加える手間は見事だ。
しかし、ガンダム・ラウムの背にあるバインダー。ノワール・ウィングでの動きでその弾丸も回避される。
弾が尽きればここぞとばかりの攻撃し、流れるようなリロードで振出しに戻る。展開は、かなり持久戦に近づいてきた。
「なかなかやるようじゃないか。おかげでキラーライフル・ショーティが弾切れだよ!!」
二丁の拳銃を捨て、グレイズ・ライフルを構える。
「ジャイアントバズが今ので弾切れ。マシンガンの呼び弾倉は０。残りはバズーカとシュツルムだけか。」
ダリルも、弾切れ尾を越した武器を捨て、燃料タンクを切り離して加速する。
そのまま銃撃戦が繰り広げられる。
「相手の動きは速い。だが……」
「奴の反応速度は中々だ。けどね。」
互いの火器を放ちながらだんだんと接近していく二人。
「追えない訳では、無い!!」
「それだけでは、勝てないよ!!」
同時に放たれる弾丸。バズーカの弾頭を顔をそらして回避したリーヴァルに対し、サイコ・ザクのサブアームの片方が見事に撃ち抜かれた。
「くっ!!」
「終わりさ!!」
そのまま、さらに弾丸が放たれる。しかし、ダリルは、それを防いだ。

弾丸が放たれる部位、コクピットを狙って放たれた弾丸は、盾代わりにしたマシンガンを代償に、防いで見せた。
「武器を盾にッ!?」
「そこだ!!」
そして放たれたシュトゥルム・ファウスト（逆転の一手）
それを躱しきれず、弾頭はラウムの頭部を直撃した。
「このまま!!」
ヒートホークを抜き放ち、とどめを刺そうとした。
「何ッ!?」
しかしその瞬間、とうとつにラウムから飛び出し、膨らんだ何かに、ヒートホークの太刀筋が狂わされた。
グレイズをデフォルメ化した様なゆるい風船は、
「ダミーバルーン!?」
とっさに切り伏せると、割れた風船からは、あふれんばかりの白煙が噴き出す。
そして、その奥から、ラウムが二本の近接ブレードを抜き、切りかかってくる。
「クソッ!!」
とっさにヒートホークで×字の剣閃を、防ぐ。すると、
『認めるよ。』
聞こえて来たのは、リーヴァルの声だった。
「何？」
『君は弱くない。そう、』
言葉に気を取られた瞬間、胴体を蹴り飛ばされる。
「ぐあッ!!」
『僕が本気を出さなくてはいけない程度にはね!!』
その言葉と共にラウムが飛翔する。向けられたのは、ライフルに付属されたグレネードランチャーだ。
そこから放たれたグレネードから、再び白煙が放たれる。
「またスモーク!?」
しかし、それに気を取られた瞬間、背後を取られる。

「囮か!!」
しかし、振り向いた瞬間再びスモークが放たれる。乱射されたスモークは、宙域に小さな濃霧をもたらしていた。
「一体何を!?」
とっさに機体を上昇させ、スモークから逃れようとしたが、機体の頭部が出るかでないかと言った位置に来たとき、スモークを利用し、リーヴァルが背後から襲いかかった!!
「そこだぁッ!!」
しかし、ダリルも機体を反応させ、背後のリーヴァルを切り裂こうとする。
それを見たリーヴァルは不敵に笑い、
『甘いね。』
バッ!!その攻撃を跳ねるように回避し、初めて『隙だらけの背後』をさらしたダリルに、ライフルの銃口を向けた。
『チェックメイトだよ。サバイバー。』
ダリルのエンブレムを見てか、そんな声を上げる。
「しまった!!」
ラウムが引き金に手を掛けた瞬間、そこを弾丸が通り抜けた。
「ッ!?」
『何ッ!?』
グレイズライフルが破壊され、飛ぶように距離を取るリーヴァル。
『やれやれ、間に合ったみたいだね。一安心だよ。』
そこにいたのは、長銃を片手で構えたヴァッサーゴだ。
『あれは……。』
ジッとヴァッサーゴを眺めるラウム。
しばらくして、ラウムは二機に背を向けた。
「ッ……お前……!!」
ラウムを睨みつけるダリル。
『二対一か。引かせてもらうよ。ガンダム・フレームと得体のしれないＭＳ、両方相手にするほど驕っちゃいないさ。』
「……今回は翻弄されたが、今度はそうはいかないぞ。」

そう言い、リーヴァルを睨みつけるダリル。
『フッ、楽しみにしておくよ。』
そう言い、ノワール・ウィングを広げるリーヴァル。
「ダリルだ。」
『？』
「ダリル・ローレンツ。覚えていろ。どこにいようと、必ず貴様を撃ち落とす男の名前だ。」
『フッ、ハハハハ!!』
その声に、リーヴァルは高笑いで返した。
『いいね。威勢だけは認めるよ。ラウムに傷をつけた事への礼だ。リーヴァル・バクラザン。君を狩る狩人さ。この名と相棒を、脳裏に焼き付けておくんだね。』
そう言い、飛び去って行った。

強力な助っ人。しかし、奇人変人の集まりで？

「？敵が退いて行く……。」

リーヴァルに逃げられたダリルは、次々と退却していく敵をいぶかしんだ。

『やぁ、無事みたいで何よりだよ。』

緑をベースにしたそのＭＳは、ダリルに語りかけて来た。

「お前は……。」

『ヒヨリ・ソウだよ。傭兵部隊【ヘブンズ・ナイツ・ブリケード】のパイロットさ。』

「その機体……阿頼耶識か？」

この世界のガンダムタイプ。その機体は、聞くところによると、神経にデバイスを接続する、【阿頼耶識システム】が必要。

奇しくも、リユース・Ｐ・デバイスと似ているのだ。

『そんなところまで……まぁ、ボクのは最初期の阿頼耶識。それを独自に開発した奴だけどね。』

ディスプレイに映った男は、そう言う。

『そんな事より、キミも中々に疲れてるでしょ？行こうよ。』

そう言い、反転して、ＭＳの手を向ける。

「あれは……!!」

「マジかよ……!!」

拡大されたディスプレイに映し出されたのは、白がベースになった、巨大戦艦だ。

流石のイオも、その大きさに目を奪われる。

『世界で６隻だけ生産されたスキップジャック級を越える超巨大戦艦。

【フロストヴィトニル級巨大戦艦】その名も、【サンクチュアリ】さ。』

『見つけたのはお兄さんなんだけどね～。』

得意げに説明するソウの回線に割り込んで来たのは、黒のコートに、ワイシャツ姿の金髪の男性だ。

それを見たコーラルは、

『撤退だ。』
『は？』
そう通信を入れた。
『奴らは火星支部（我々）の現状の戦力で対応できる奴らではない。これ以上の戦闘は好ましくない。撤退だ。』
『りょ、了解!』
コーラルの指示を受けた機体たちは、次々と退却していく。
「……どうするの？オルガ。」
そう警戒する三日月の視線は、近くにいるレコのＭＳに注がれている。
「アンタらの目的は……。」
画面に映っているのは、サンクチュアリのブリッジの様子。
ブリッジ内には、眼鏡の男性と、オレンジ色の奇抜なフードをかぶった少女。
二人が複座に座り、オペレーターを担当しているようだ。
中央の艦長席で足を組んで座っているのは、先ほどソウとダリルの会話に映った、金髪の男性。
一見ただのチャラいチンピラだが黒コートと、油断なく獲物を狙う狩人の様な瞳が、只者ではない雰囲気を醸し出している。
彼の隣に立っているのは、ワンピース姿の少女だ。年齢は、三日月達より若干上だろうか。ポニーテールに、気の強そうな瞳。そして、腰に差した刀が、力強い空気を身に纏っている。
『ああ、そう警戒しなくてもいいよ。お兄さんたちの目的は、君たちの護衛さ。』
「何のためにだ？」
『傭兵にそれを聞く必要が？』
オルガの問いに、そう答える。つまり、『雇われたからだ。』と言いたいのだ。
「クライアントは？」
『クライアントから、時が来てから教えろ。と言われててね。』
そうはぐらかす。

『このサンクチュアリは、他の戦艦と連結できる。一度話をしようじゃないか。面と向かって、ね。』
その言葉を拒否するのは得策じゃない。そう考えたオルガは、
「分かった。ミカたちを帰還させろ。イサリビとサカリビはあのデカいのの両横に展開。」
その声に、
「りょ、了解。」
とまどいながらも、鉄華団のメンバーは従った。

「あ、あ、あ、やめろ、俺の船がぁ!!!」
一方、少し離れた宙域で、全面装甲に異様な改造の施された戦艦が、先ほどの戦闘のビデオを見ていた。
場面は、資源採掘用の小惑星にアンカーをひっかけ、反転して、速度を付けたままギャラルホルンのハーフビーク級に体当たりし、主砲の掃射で打撃を与えていたところだ。
この離れ業を称賛するより、自分の船の損害を気にするデブ。マルバ・アーケイは戦艦が激突した所で、
「あああああ!!」
と、絶叫を挙げた。
「うわっ、オッサンだっせぇ。」
それを見て、そうコメントを付けるのは、ぺろぺろキャンディーを舐める小柄な少女。
「そう言ってやるな。こいつには、浪漫よりも金なのさ。」
そう言うのは、白いサイバーコートの男だ。手には、ノートパソコンを抱えている。
「おいおいお前ら。こいつらは、俺のクライアントだからな〜。そうあんまり言ってやるなよ。」
マルバにボロクソ言う二人をそうたしなめる白い帽子をかぶった、黒い長髪の伊達男。

「はいはい。わーってるよ。」
そう肩をすくめる少女。
「フン。機体の整備に行くぞ。リツ。」
「はいよ～。コウ。」
面白くなさそうに鼻を鳴らした青年は、そう言い、少女とブリッジを出て行った。

「で、結局アンタらは何なんだ？」
サンクチュアリに移動したオルガは、金髪の男性をそう問い詰める。
オルガの傍にはビスケットと三日月の代わりにクーデリアとアトラが、金髪の男性の傍には、ソウと刀の少女がいる。
「順を追って説明しようか。俺は篠木・ケイジ。こっちは俺の助手の、千堂院・サラちゃん。」
ケイジは、そう言い、刀の少女を指した。
「千堂院・サラだ。よろしく頼む。」
少女、サラはそう言い、礼をした。
「お、おう。オルガ・イツカです。こっちはビスケット。で、ウチの給仕係のアトラと」
「クーデリア・藍那・バーンスタインと申します。」
オルガは、そう自己紹介し、ビスケット、アトラを紹介。クーデリアの紹介に移ろうとした時、彼女が遮り、自分で礼をした。
「まずは礼を言わせてもらいたい。アンタらのおかげで、命拾いした。」
そう言い、頭を下げるオルガ。それに倣い、ビスケットたちも頭を下げる。
「まぁまぁ、堅苦しいのは無しで行こうよ。」
しかし、ケイジはそう、オルガ達に頭を上げるように言う。
「それで、今回俺達を呼んだのって……。」

オルガはそう聞く。
「いやねぇ、一つは、信頼してほしかったからかな？あと、これから世界に喧嘩を吹っ掛ける、クーデリア・藍那・バーンスタインと、それを守る君たちの顔を、拝んでおきたかったのがある。」
「そうですか……。」
首に手を当てたまま、そう言うケイジ。
「さて、本題に移ろう。君達は、これからどうするつもりだい？」
ケイジは、彼らに、これからの身のふり方を聞いた。
「オルクス商会と言う後ろ盾は、ウチのギンが宇宙の塵に変えてしまった。後ろ盾のない状況じゃ、このまま地球行きなんて無理がある。」
「はい……。考えはあります。」
その言葉に、オルガはそう頷いた。
「今俺らに必要なのは、デカい後ろ盾。オルクスなんか目じゃ無いくらいの。」
「ふぅん。で？売り込み先は？」
「……テイワズです。」
「……良い目の付け所だ。オルガ君。」
その言葉に、ケイジは満足そうに微笑む。
「はい。有難うございま……。」
「で？」
緊張で固まるオルガに、追撃を駆けるケイジ。
「は？」
「君達は、どうテイワズに売り込むつもりなんだい？今から行くかい？門前払いがオチだよ。」
「……。」
その言葉に、つばを飲み込むオルガ。その事は、自分がよく分かっているのだろう。
「それはまだ……考えていません。」
「考えていない？」
その言葉に、ケイジのトーンが落ちる。オルガは自覚した。今俺

は、この人に計られていると。この人に、心理戦で勝つには経験も力量も足りないと。
「考えは……アテはあります。」
「聞かせてもらおうか。」
そう言い、鋭くにらみつけるケイジ。オルガは、蛇に睨まれる蛙の気分を味わった。
「俺達の戦力。俺達に出来るのは、戦うことくらいしか。けど、それだけは、絶対的な自信があります。」
ゴクリ、と唾を飲み、この答への返答を待つ。
ケイジは真剣な顔つきで、ジッ、と、オルガを見続けた。
「う～ん、サラちゃん、どう思う?」
すると、おもむろにその姿勢を解き、ソファにもたれ掛り、サラに指示を仰ぐ。
「え?私が、ですか?」
いきなり指されたサラは、一瞬テンパるが、
「そうですね……。私は、アリだと思います。ただ、なら、一度テイワズにそれを証明する必要があるんじゃないかと……。」
と、鋭い意見を言う。
「成る程ね……。」
そう言い、目を閉じて考え込む。オルガは、自分達への返答を待ち、冷や汗を流した。
クーデリアやビスケットも、何も言うことが出来ない。
かくしてその返答は……。
「いいんじゃないかな?」
肯定だった。
「確かに君たちの戦力は中々だ。俺は賛成するよ。テイワズにパイプを作る。俺達は手助けはしよう。」
「あ、ありがとうございま……」
「でも、」
オルガの礼を、手を前にして遮った。
「交渉のカードを掴むのは、あくまで君たちだ。その腕で、その知恵

で、テイワズリーダー、マクマード・バリストンを頷かせてごらん。」
「……。」
「俺達へブンズ・ナイツ・ブリケードは、君たちを応援しよう。よろしくね。」
その言葉と共に、彼は手を差し伸べた。

束の間の休息

ケイジ達とオルガ達との会話が終わった後。オルガ達は応接室を後にした。
「ほら、机に脚乗せないでくださいよ。ケイジさん。」
「いいじゃないのサラちゃん。これ位は、さ。」
だらしないですよ。と睨むサラ。はいはい。と、肩をすくめて足を下ろすケイジ。
どっちが上だか分からない様な状況だ。
「それにしてもさ～、」
にこやかにケイジはサラを見る。
「彼ら、どう思う？」
「そうですね……。」
その声に、サラは顎に手を当てて考えた。
「一言で表すなら、宝石の原石。磨けば光るでしょうね。」
「キミから見てもそうか～、でも、」
「はい、まだかなり粗削りだと思います。第一、あの船、医者、乗ってないですよね？」
そんなの自殺行為ですよ。と言うサラ。手厳しいね。とケイジは肩をすくめた。
「さてと、この後どうしようか？」
「……そうですね……。彼らには、船内を自由に探索する許可を出そうと思ってたんですけど、」
「いいと思うよ？もちろん、機密には触らせないでね。」
それだけ言うと、立ち上がり、応接室にある本棚から、一冊の本を取り出す。
その本を開けば、実は本の形をした箱で、中には一冊のタブレットが。
「さてと、定期連絡の時間だ。ホウレンソウは、何時になっても社会の基本だからね。」
タブレットの電源を入れれば、直通回線の文字が。

通信先は、『Ｌｅａｖａｌ　Ｂａｃｕｒａｚａｎ』となっていた。

「なぁなぁ、聞いたか？」
サンクチュアリ級の中を移動する、機械弄りが得意なダンデと、色黒で地味めなチャド。ダンテが、チャドに話しかけていた。
「この戦艦の中、好きに見ていいんだと。」
「聞いたも何も、俺もその場に居たぜ？ただし、ロックしてある部屋に入るにはノックが必要。入っていいと言われたら、入っていいんだっけ？」
「ああ。ま、他人の私室を覗く趣味は無いからな。」
そう雑談を交わしていると、何やらおいしそうな匂いが飛んできた。
それと同時に、
「わあぁ……。」
と言う何やらキラキラした声が、気になった二人は、匂いのする部屋に入ってみることにした。
どうやらそこは食堂とつながっている、厨房の様だ。奥には、長身で、黒髪の男性が、赤い中華柄のエプロンを付けて、カウンターの前にかじりついているアトラを見ていた。
何事かと思えば、二人は、男性が作ったと思われる、何やら小洒落た料理にアトラが目を輝かせていた。
「カイさんは凄いですね!!こんなオシャレな料理が作れるなんて!!」
「恐縮です、アトラさん。とはいえ、これは得意料理なので。」
カイと呼ばれた男性は、にこやかにそう言う。
「へぇ……、何でしたっけ、エッグベ……、」
「エッグベネディクト。ですよ。半分に切ったイングリッシュマフィンの上に、チーズやベーコンを盛り付けた、お手頃でおいしいご飯。軽食にもってこいです。はい。」
すると、カイが、ダンテたちに気が付いた。
「おや、貴方たちは鉄華団の……。どうかしましたか？」

「え、いや、何か美味しそうな匂いがしたもんだから……。」
「ええ、ちょっと気になって……。」
何やらいたずらを見つかった悪ガキの様な気分になり、目を泳がせながらそう言う二人。
「そうでしたか。」
「いやなんか怪しいですよね。」
カイにそうツッコむアトラ。早くも仲良くなっている様だ。
「お腹がすいているのなら、何か軽食でも作りましょうか？お玉とフライ返しとフライパンは可能な限り持ち歩くようにしているんです。」
「いやそれあっても食材とコンロ無いと料理できませんよね？」
「些細な事です。」
「料理したい。手元に調理器具。けれども食材無いじゃ流石に笑いごとになりませんよ？」
些細な事か？と、二人も思った。

ビスケットたちと別れ、一人で船内を歩いていたオルガ。すると、ちょうど角を歩いてきた人物と、ぶつかってしまった。
「うおっ!?」
「おわっ!?」
似たような悲鳴を上げ、よろけるオルガ。見ると、ぶつかってしまったのは、きついメイクのパンク風の服装の女性。レコ・ヤブサメだった。
「悪ィ。アンタ、大丈夫か？」
「ッテテ……。ああ、気にしないでくれよ。……あれ？アンタ、」
初見では一歩ひいてしまうインパクトのある彼女の見た目にも物おじせず、レコを見るオルガ。一方レコは、オルガの正体に気が付いたようだ。
「鉄華団の団長さんだろ？今回の取引相手の。」
「ああ。オルガ・イツカだ。」

「レコ・ヤブサメ。ここのＭＳパイロットだよ。」
　金具の付いた指出しグローブに包まれた手を、オルガに差し出す。オルガはそれを取り、握った。
「ところでアンタ、この船を案内しちゃくれねぇか？」
「ん？そりゃいいが、何でだ？」
「そりゃ、同盟関係と言うか、アンタの所に身を置いてるわけだし、この事をある程度知っておきたいからな。アンタ、詳しいだろ。」
「真面目だな。いいことだぜ。よし、案内してやるから、付いて来いよ。」
　感心したようにオルガを見て、そう言い背中を向ける。その姿に、たくましいな。と思ったオルガだった。

「フッ……ハッ……。」
　そんな声を挙げながら、戦艦に備えられた設備の整ったジムの一角で懸垂を行うのは、筋肉隆々な肉体に包まれた、昭弘・アルトランドだ。
　暇さえあれば肉体を鍛えており、その身体に似合った？力強いスタイルの動きを、ＭＷ戦でも繰り広げる。
「鍛錬、頑張っとるようじゃな。」
「フッ……ん？」
　ジムに突然入って来た来訪者に声をかけられ、懸垂を中断する昭弘。
　振り向いては言って来た男を見て、彼は驚いた。
　赤い髪と赤い髭。雄々しい顔がよく似合う鍛え上げられた鋼の肉体は、昭弘が見上げてしまうほどだ。
「アンタは……。」
「バーガーバーグ・Ｑ太郎じゃ。よろしくな。」
　そう言って、丸太の様な腕にくっついた、大きな手を差し出してきた。
「ああ……、昭弘・アルトランドだ。」

「いい名前じゃねぇか。親父さんが付けてくれたんか。」
戸惑いがちに差し出した手を、Ｑ太郎はがっしりと握り、上下に振った。
「……。まぁ、な……。」
父親と言う言葉を出された昭弘の顔に、暗い影が差す。
二人の間に、重い空気が流れた。
「……悪かった。別にお前さんの傷口に塩塗り込むような真似をしたくて声をかけたわけじゃないんじゃ。かんにんしてくれい。」
少々重い表情で謝罪するＱ太郎。彼も、孤児、ヒューマンデブリと言った人間達で構成された鉄華団の事情くらいは、知っているのだろう。
「いや、気にしてない。ちょっと、思い出しちまっただけだ。」
「そうか……すまねぇ。オレも無神経が過ぎた。」
何を思い出したかは聞かないＱ太郎これ以上重い空気を流したくないのだろう。
「このジムはどうぜよ？ここの器具は、ケイジに無理言って集めてもらった物もあるんじゃ。気に入ったか。」
「ああ。内装より、器具に……と言うか、器具以外に金をかけていないな。」
休憩用に、冷水器とタオル。粗雑なソファーが置いてある程度だ。調度品の類は少ない。と言うか殆どない。
「おうよ。どうした？内装がもっといい方が良かったか。」
「それを望んではぜいたくだ。むしろ……このくらいがちょうどいい。」
「そうか。そりゃ良かったぜよ。」
そう言い、ニカッ、と笑うＱ太郎。
「アンタは……。」
「ん？どうした？昭弘。」
筋トレに戻ろうとした昭弘だが、ふと、Ｑ太郎に振り向き、一つだけと問いた。
「何で、俺みたいなヒューマンデブリに気さくに話しかけるんだ？」

そう言えば、Ｑ太郎は、ああ、その事か。と、
「そりゃぁ、ヒューマンデブリだって、人間だと思ってるからに決まっとるぜよ。
いや、本当はデブリ（ゴミ）だなんて呼ばれちゃならねぇ。人が人に金で売られるなんてこと、あっていいはずがねぇぜよ。」
その言葉に、昭弘は驚いた。
「アンタは……。」
「おう。オレはこの価値観はまちがってねぇとおもってるがきゃ。」
そう言い、ドンと胸に手を当てる。
「フン。いいこと言うじゃねぇか。」
ガチャ。と、ジムの奥にある扉が開き、中からタオルを首にかけ、汗を滴らせる、青い髪で、色黒の引き締まった身体をぴっちりしたボディースーツに包んだ男が、壁に寄りかかっていた。
「アンタは……。」
「直道・クルマダだ。クルマダって呼んでくれ。」
「あ、ああ。」
今まで言われたようなことが無い事を言われた後で、理解が追いつかない昭弘は、そう空返事をこぼした。
「おう、クルマダ、もう上がりか？」
「まさか。休憩だよ休憩。トレーニングには適度な休憩が必要なのは分かってるだろ？」
「そうかい。なら、コイツと一緒に筋トレでもせんか？その部屋に居たっちゅうことは、大方シュミレーションかシャドーボクシングでもしてたんだろ？」
そう言われれば、クルマダは肩をすくめた。
そのやり取りを見て、彼らとは気が合いそうだと考える昭弘だった。

「やぁ、」
年少組のまとめ役、タカキと一緒に道を歩いていたダリルに、そう

声をかけたのは、バケツを被った少女、カンナを後ろに従えた、ソウだ。
「お前は……。」
彼を見たダリルは、その纏う気配と声で察した。あの、自分を助けたガンダムのパイロットだと。
「ああ。分かるんだね、流石は、あのザクのパイロットだ。」
分かっていたのか。そう驚く彼に、気配でね。と苦笑するソウ。
「ダリル・ローレンツだ。」
そう言い、義手の右手を差し出す。ソウはそれを取りながら、
「ヒヨリ・ソウだよ。こっちは、」
「キズチ・カンナです。よろしくお願いします。」
そう言い、頭を下げる。
「え、何でバケツ？」
頭にかぶっているバケツに、タカキはそうツッコむ。
「あ、あはは、よく言われます。」
それに、苦い表情を浮かべるカンナ。と言うか、タカキからしてみれば、装飾が、何と言うかドSな雰囲気を醸し出す、看守風の風貌のソウも、頭にバケツを被ったカンナも、中々にインパクトが強いようだ。
「そんな事より、ボクは君の方が気になるな。ダリル君。」
「……。」
ダリルも、そう言うソウを警戒する。
「あはは、怖がらないでよ。そうだ。」
と、カンナに目で合図を送る。
「しばらく、二人で話をしないかい？カンナは、そこの金髪の彼に、船内を案内してあげてよ。」
「わかりました。ソウさん。」
それに、コクリ。とうなずいたカンナは、タカキの手を取った。
「さぁ、お気に入りの場所に案内してあげます。付いて来てください。」
「え、は、はい……。」

「さぁ、行こうか。」
ダリルと二人きりになったソウは、先ほどまでとは違う感じの笑みを浮かべた。

束の間の休息　後編

「さてと、自由に探索してもいい。って言われてもな～。」
【サンクチュアリ】の船内で、イオはそうぼやいた。
「お？」
しかし、歩いていると、気になる部屋を見つけた。
【音楽室】と書いてある。
「……エレメンタリー（小学）・スクール（校）かよ……。」
そうぼやきながらも、
「ドラムあっかな？」
そう考え、扉を開ける。すると、
「おお!!」
あった。奥に、ドラムがあったのだ。
「この世界（こっち）に来てから全然ヤれてなかったからなぁ。」
そう言い、近くにあったドラムスティックを引き抜く。軽く色々なものを叩けば、いい音が鳴り響いた。
「スティックよし、楽器よし。オーディエンスとボーカルとドラム以外の楽器を鳴らす奴がいないのが残念だが、ヤるか!!」
そう言い、ドラムを軽快に叩く。曲は、大昔のジャズ、ジャイアント・ステップスだ。
おのれの音楽の世界へ入り、気が付いたら、顔から汗を滴らせるほど、ヒートアップしていた。
「さて。次はどんな曲を……。」
その時、パチパチパチパチ。と、拍手が聞こえてきた。
「あ？」
「すっごい上手いね～。あなた。思わず聞き入っちゃった。」
気が付くと、音楽室の扉の近くに、妙な帽子をかぶり、派手な装いの女性が居た。
「アンタは、」
「あ、私、鶴城・マイっていいます。よろしくね。」
と、手を差し出してくる。

「イオ・フレミング。鉄華団の社員だ。」
この肩書きにも慣れて来たな。そう思いながら、彼の手を握る。
「キミって、あのグラシャラボラスと戦ってた人でしょ？度胸あるね～。」
「グラシャラボラス？ああ、あいつか。」
苦い思い出だ。と呟く。彼はコクピットで、グラシャラボラスから発せられる無邪気な少年の声と、何人も人を殺してきた悪魔の様な濃密な殺気。そして浮かび上がる、機体の黄金の爪が、コクピットを貫き、己を肉塊にするイメージ。あの時ほど、【敗北】を感じたのは、ダリルにＦＡガンダムを破壊された時以来だ。
それを思い出し、ギリッ、と奥歯を噛む。
「チッ。」
「あ、ごめん。いやなこと思い出した？」
「ああ。まぁな……。」
次会った時は……負けねぇ!!
イオは静かに、目に闘志をもやした。
「もし必要なら。私、オペレーターやってるから、アシストするよ。」
「そうかよ。頼りにしてるぜ。」
マイの提案に、イオはニヒルに笑ってそう言った。

「……。」
カツカツカツ。と、無言で艦内を歩く眼鏡の女性。彼女の名は、フミタン・アドモス。クーデリアの従者だ。
「(……不味い事になった。)」
しかし、彼女には、みんなに伝えていない裏の顔がある。
それは、クーデリアの支援者大富豪ノブリス・ゴルドンから使わされているという事。そして、ノブリス・ゴルドンの目的は、『クーデリア・藍那バーンスタインの死により、世界に暴動を引き越すこと。』そうすることで、武器商人であるノブリスの武器は、暴動を起こす側と鎮圧する側。双方に売れる。彼は自分が儲かるために、

クーデリアに亡き者になってもらおうと言うのだ。
「(……いくら助っ人が来ようと変わらない。私の目的は……。)」
『フミタン、何時も助かっています。』
「(ッ……なぜ、お嬢様の言葉を思い出す、お嬢様の顔を思い出す……。私の目的は変わらない!!)」
「あの……。」
ハッ、と、フミタンは声をかけられていることに気が付いた。
振り向けば、四角眼鏡をかけた、会社員風の男が後ろに居た。
「貴方は?」
「あ、私は、このサンクチュアリでオペレーターをしている、俊介・ハヤサカというものだ。貴方は確か……。」
「フミタン・アドモスです。」
「そうだったね。挨拶をと思ったんだが、何やら思いつめた表情をしていたからね。大丈夫かと思って。」
「ええ。少々考え事をしておりました。ご心配お掛けしてすみません。」
「そ、そうか……敬語を使われるとむず痒いな……」
そう言いながら、手を差し出した。
「まぁ、仲良くやろう。」
「……そうですね。」
「(……ノブリス様の為にも、利用をさせてもらいます。)」
フミタン・アドモスは仮面をかぶる。その心に、わずかな葛藤を残しながら。

「……オルガと離れちゃったな。」
三日月・オーガスは、広い船内で迷っていた。すると、
「うぎゃぁ!?」
「!?」
ドンガラガッシャーン!!

と音がして、曲がり角かファイルが飛んできた。
「……うう……イタタ……げうっ!?」
見ると、異様に伸ばした赤髪の少女が、倒れていた。さらに追い打ちで高く舞い上がったファイルが落下して頭を直撃していた。
「……アンタ、何してんの?」
「止めて!!私をそんなチベットスナギツネを見るみたいな目で見ないでください!!」
変な奴だな。というような三日月の視線が痛い!!という様に手を振る。
「あの、先生に書類を届けようと思ったんですが、あそこの段差で躓いちゃって……。」
「へ〜。」
彼女が指差したところにあった段差。ホースを何かでコーティングしているようにも見えた。
「おや、やはりナオサンでしたか。」
すると、廊下の奥の扉が開いて、白くうねった髪の、眼鏡をかけて巻肩の初老の男性、が声をかけて来た。
「アンタ、誰?」
その男性に向け、三日月はそう問いかける
「おや、そのマーク、もしかして鉄華団の方ですかね?」
「俺が聞いてるんだけど。」
男の質問に、三日月はそう言う。
「え?ちょ、ちょっと!!先生に失礼ですよ!!悔い改めてください!!」
「もじゃもじゃの人、何?今俺この人と話してるんだけど。」
「モジャモジャ!?」
三日月の発言にショックを受ける少女。
「こらこら、女性にそういう事を言ってはいけませんよ。それと、質問を質問で返したのは不味かったですね。私、このヘブンズ・ナイツ・ブリゲードでデータ解析や会計の仕事をしている三島・カズミと申します。彼女は私の教え子の、絵心・ナオさん。貴方の名前を教えていただけますか?」

と、三日月に問いかける。
「三日月・オーガス。」
彼が名前だけ答えると、
「そうですか、三日月君というのですね。よろしくお願いします。」
と、手を差し出してきた。
「うん。よろしく。」
今は手は汚れていないし、と、握手をする。と、
グシャッ。と音がした。
「ん？」
散らばっていたナオの書類の一枚を、踏んでしまっていたのだ。
「あ～!!」
ナオが死にそうな声を上げる。
「おやおや、まずは、片付けですね。手伝っていただけますか？」
三島の頼みに、三日月は頷いた。

「ねぇ、シノ……。」
「ん？どうした？ヤマギ？」
意気揚々と船内を探検していたノルバ・シノは、後ろに居たヤマギの声に、立ち止まって振り返った。
「ここ……どこ？」
「……俺にもわかんねぇ。」
どうやら、こいつらも迷っている様だ。
「ちょ、シノっ、どうするの!?」
「わかんねぇ!!けどよ、歩いてれば何とかなるだろ!!」
「いつになく適当!!」
そんな言い合いをしてると、
「ん？お前ら何してんだ？」
ヒョコッ、と、奥の廊下から、茶髪の青年の顔がのぞいた。
「ん？ああ、迷っててな。」
「シノが右だ!!左だ!!今度は真っ直ぐ!!って、適当に歩いていくから

……。」
「いいだろ別に!!」
「というか、それなら元来た道を戻ればいいんじゃねぇの?」
「うん、実は元来た道?を戻ってる最中だったんだよね。」
「おう!!今度は多分右に曲がったと」
「おい待てそっちはエアロックだぞ。」
「……。」
「……。」
ヤマギとシノは、目を合わせる
「こりゃ本格的に迷ってんな!!」
「笑ってる場合じゃないでしょ!!」
「お前、苦労してそうだな……ともかく、俺、ジョー・タヅナって言うんだ。よろしくな!!」
ニカッと笑って手を差し出す。
「ノルバ・シノだ。よろしくな!!」
シノも同じように笑い、ジョーの手を取った。

「……。」
クランクは、レストランの様になっている食堂の一席にクランクは座っていた。
「(フロストヴィトニル級戦艦。厄災戦時代に数隻だけ建造された超大型級戦艦。か。)」
彼は別に食事をとりに来たわけではない。落ち着いた雰囲気のここなら考え事にもってこいだと考えたのだ。
「(そんな物が、まだこの時代まで……しかも、一民兵組織が持っているとはな……。それにしても……。)」
辺りを見回す。丸テーブルに椅子。落ち着いた雰囲気の木張りの壁や床。小洒落たランプ。地球や火星の高級街にあるレストランとも、差支えない。
「気になるニャン?」

「ッ!?」
ヒョコッ。と、クランクの席の反対側、机の下から、丸い猫のクッションが現れる。
「フッフッフ。驚いたワン?」
更に、猫だろうか、犬だろうか、オレンジに縞の付いたミミ付きフードマントを被り、手には、物を掴むのが難しそうな、犬の手（猫の手?）グローブ。顔をマスクで隠した少年が現れた。
「いつからそこに?」
「オジサンが目を瞑っていたから、その間にここまで来て、隠れてたニャン。」
「(この俺に気が付かれる事なくここまで……というか、犬?猫?どっちだ?)」
きっとそれは、この少年のみぞ知る永遠の謎なのだろう。
「どうかしたワン?」
曇りない瞳で見てくる彼は、よく見れば、見た目こそ奇抜だが、マントの下はTシャツと短パンというラフな格好をしている。それに、
「一つ聞くが、何歳だ?」
「ん?12歳ニャン。」
「……若いな。」
「この船じゃ、最年少ワン。でも、鉄華団のみんなはもっと年下ニャン。だから僕が守ってやるワン。」
「……頼もしいな。」
彼の笑みに、何ともいえない気持ちになったクランクは、そう言ってしまった。

「うう。迷っていまいました……。」
そしてここにも迷子が若干一名。
赤い服を身に纏った、クーデリアだ。
「あれ?クーデリアさんじゃない。どうしたの?こんな所で。」
途方に暮れていた彼女は、黄色い服の少女を見て、思わず顔がゆる

んでしまった。

槌頭の蛇との邂逅

ドガァン!!　と言う爆音がイオのヘルメットのスピーカーから聞こえてくる。

「くっ!!　このッ!!」

とっさにサブレッグを利用して飛びのいた時だった。爆炎の中から伸びたワイヤー付きの銛がシールドに突き刺さった。

「なっ!!」

『貰った!!　シーサーペント!!』

放たれた電流が、盾を持っていた左腕を駆け巡り、左腕のパワーが消失。シールドを離してしまう。

「しまっ!!」

晴れて行く爆炎の中から現れたのは、ワイヤーを引いて銛を銃に引き戻す機体と、そのまま右手に持った薙刀のような武器を抜いて、突っ込んでくる機体。

『貰っ　たあぁぁぁ!!』

しかし、その刃を、素早く抜いたヒートサーベルで受け止める。

『止めてくる……!!』

『やっぱりすごいわね、サンダーボルトの英雄は!!』

そう響く二人の女性の声に、イオは笑みを浮かべる。

「テメェらも随分と成長したもんだな!!　ナンシー、ルルー!!」

［時は、三時間ほど前に遡る。］

「おう、来たか、イオ。」

【サンクチュアリ】のブリッジに、パイロットや、ブリッジクルーに対する招集がかかり、一足遅れて到着したイオは、オルガにそう声をかけられた。

「ああ。で、何だ？　緊急収集って。」

そう言うと、ダリルが、イオに、その義手で、正面のモニターを見せた。そこに映っていたのは、白い帽子をかぶった、黒髪のこじゃれた男。そして、見知った太った男。

「マルバのジジィ？　なんせあんなとこにいるんだ？」

「開口一番それか!!　失礼な奴だな!!」

イオの発言に、マルバが声を上げる。

「で、何でいるんだよ？」

イオがダリルに問いかければ、ダリルが、

「ああ。どうやら、テイワズの幹部に、奴の知り合いが居たみたいだ。名瀬・タービン。テイワズの輸送部門を取り仕切るタービンズの首領で、テイワズのトップと親子の盃を交わしている。」

「オイオイ、それってもしかしなくてもヤバい？」

「ああ。」

それもその筈。ヘブンズ・ナイツ・ブリケード。通称ＨＫＢだけでは、物資や航路に不安が残る。その為にテイワズを頼ろうとしていたところで、（多分）敵であるマルバの知り合いがテイワズの重鎮で、おまけにここに来ているという事は、選択を間違えればタービンズと、ひいてはテイワズとの戦いに発展してしまう可能性もある。

「しばらく前から背後を取られてます……。レーダーがエイハヴウェーブをキャッチしたときにはもうなかなかの距離に。」

オペレーターのハヤサカがそう教えてくれる。するとモグモグと火星ヤシを食べていた三日月が、問いかける。

「そう言うのが上手い相手だってこと？」

それに頷いたのはソンネンで、

「ああ。用心しろよ。」

と、三日月に檄を飛ばす。すると名瀬が、

『っと、何かコソコソしてるところ悪いな。これで、お前さんらのパイロットは全員そろったってことで良いんだよな？』

その質問に、ケイジは、

「ああ。俺の方はそろってたけどね。オルガ君の方は？」

と、ブリッジの艦長席から、オルガに問いかける。オルガは壁に寄りかかって腕を組んだまま、

「ああ。問題ねぇ。」

とだけ。答えた。

「なぁ、それで、どういう状況なんだ？」

結局、何故名瀬がこんな話をしてるのかわかってないイオが、ソンネンに問いかける。

「ああ、そもそも、俺たちが乗ってきた船。イサリビは、元々マルバの船だった。というか、俺達鉄華団は、マルバのＣＧＳを乗っ取って出来上がった組織だ。あの名瀬は、クーデターを起こした俺達から、マルバの資産を取り返そうとしてんのさ。」

「ナルホド……。って、それってヤバくね？　本格的にテイワズと敵対しちまうじゃねぇか。」

「ああ。だから、アイツ等は交換条件を出してきた。」

「条件？」

イオが首をかしげると、ソンネンが、

「俺たち全員に、働き口を紹介するんだとよ。」

と、答える。

「俺たち全員に、まっとうな仕事を用意するらしい。……全員一緒、という訳にはいかないらしいがな。」

「おいおい、そりゃスゲェオイシイ話じゃねぇか。クーデリアは？」

「マルバの資産って扱いになってるらしい。」

ソンネンのその言葉にイオは、

「前言撤回だ。最悪だな。あのデブにクーデリアを渡したらどうなる事やら……。俺達がテイワズの配下になって、クーデリアの護衛の仕事を引き継ぐってのは？」
「すでにビスケットが提案した。」
「……で、どうなった？」
「分かってんだろ？」
「そんなに甘いわけねぇよなぁ……まぁ、そうなら、さっさと投降して働き口ってのを紹介してもらうのが、一見ベストな選択だけどよ、」
「ああ。」

ソンネンとイオは、示し合わせたようにうなずく。近くにいたダリルも、同じことを考えていた。

「「オルガは絶対認めないだろうな。」」

『で、どうだ？お前らにとっても、悪い話じゃねぇだろ？』

という名瀬の問いに、オルガの答えは、

「断る。」

拒否一択だった。

『……その答えは、何を意味するか分かってるんだろうな？』

名瀬の眼光が鋭くなる。

「ああ。当然だ。」

オルガは答える。その口元に笑みを浮かべて。

「やってやろうじゃねぇか。」

交信が終了し、サンクチュアリには第一種戦闘配備命令が出た。ＨＫＢも、鉄華団も、それぞれ戦闘準備を進める。サンクチュアリ内部に繋がっているイサリビのブリッジ。そこでは、艦長席に座ったユージンと、その隣に立つオルガ。そして、鉄華団員と、クーデリアのメイドであるフミタンで構成されたクルーたちがスタンバイしている。

正面に映っているケイジが、

『確かに上手くいけば決まる作戦ではあるかもしれないけどね……本気かい？』

その問いに、オルガは、

「当然だ。これは、俺達とタービンズの勝負だ。アンタ等には手を貸してもらうが……筋は俺達で通してぇ。」

と頷く。

「それでこの作戦ねぇ……いやはや、お兄さんの若い頃はそこまでぶっ飛んだ発想はなかったな～。」

と、おどけて言って見せた後、真面目な顔で、

「ああ、そうそう。タービンズの船、ハンマーヘッドの背後から、三隻の宇宙戦艦が確認できた。エイハヴ・ウェーブの識別反応からして、【ファントム・ウルフ】の連中が来てるから。」

「ファントム・ウルフ？」

ケイジの言葉に、オルガが問いかける、
「俺達と同じ、傭兵団さ。マルバ、いや、名瀬が保険で雇ったみたいだね。」
と、首裏をかきながら言ってから、
「ま、アイツ等の相手は任せてよ。何かと因縁もあるからね。」
と、けろりとした顔で言う。
「その言葉……信頼していいんだろうな？」
という言葉に、
「傭兵業は信頼第一さ。裏切った傭兵は、もう二度と雇ってもらえない。信頼を裏切った傭兵もね。」
と、ウインクした。
「ああ。なら信頼させてもらうぜ。」
「任せてよ。サラさん、お願いできるかい？」
「ああ。ソウとレコ、ギンにも出てもらう。ヒナコ、ランマル、お前たちは、サンクチュアリの護衛を任せる。Ｑ太郎それと、クルマダさんは艦内に残って、緊急発進スクランブルの準備を。」
「「「了解!!」」」
と、各地から声が響く。
「よぉし、作戦通りで行くぞ!!ミカ、明弘、イオ、ダリルの四人はサンクチュアリから発進だ!!任せるぞ!!」

と、サンクチュアリのデッキで待機していた彼らにオルガが声をかける。

「ああ。任せてよ、オルガ。」

「応!!」

「さぁて、セッションの時間だな。」

「役割は果たす。信頼してくれ。」

と、それぞれが言葉を投げかけ、モビルスーツに搭乗した。

『ファントムウルフの連中は私たちが何とかする。露払いをするから、ハンマーヘッドに向かってくれ。』

と、パイロットスーツに着替えたサラが声をかけた。

「ああ。信頼してるぜ。」

と、アトラスで準備運動の様にコクピットの様々な個所をまるでドラムを叩くように叩きならしているイオが答えた。

その答えに、サラは、フッ、と笑って、

『千堂院・サラ。ヘルフィヨトゥル、出るぞ!!』

と言って、彼女の駆るヴァルキュリア・フレーム、ヘルフィヨトゥルが飛び出し、ギンたちのＭＳもそれに続く。

「イオ・フレミング、アトラスガンダム、行くぜ!!」

カタパルトなんていらないとばかりにサブレックからバーニアを噴き出して飛び出す。

『カタパルト、接続完了しました。いつでも行けます。』
「分かったよ。……でも、いいの？　先に出て。」

イオの隣のカタパルトデッキに居たのは、三日月。サンクチュアリは、カタパルトデッキが前方、後方に3づつと、後方に一台、前方に一台、そして、両横から、カタパルトこそないものの、ＭＳ搬出口がある。後方の大型搬出口で、スタンバイしてるダリルに、そう三日月は問いかけた。

『問題ない、サイコ・ザクの速度ならな。』
「そ。じゃぁ、俺と昭弘の後ろは任せるよ。」

そう言ってから、前を見る。

『進路クリア。ガンダム・バルバトス、グレイズ改、発進どうぞ。』
「んじゃぁ、三日月・オーガス。」
「昭弘・アルトランド!!」
「「いくよ。（行くぜ!!）」」

先ほどまで無口だった昭弘と三日月、二人が同時に発進した。

『続いて、サイコ・ザク、発進どうぞ。』
「ああ。」

サイコ・ザクのコネクタに接続されている義肢に目をやったダリルは、ハヤサカの声に返事をし、サイコ・ザクのブースターを点火させる。

「ダリル・ローレンツ。サイコ・ザク、出る!!」

そして、すさまじ勢いで発進した。

「敵モビルスーツの出撃を確認。こちらに向かってきます。」

タービンズのブリッジでは、浅黒い肌をした黒髪の少女、クロエ・タービンがそう声を上げる。

「数は？」

「エイハヴ・ウェーブを特定できたＨＫＢの連中は四機!! ヘルフィヨトゥルと、ガンダム・アミー、ガンダム・ヴァッサーゴ、あと、バウンド・ハウンドです!!」

「あの四人が出て来たのか。」

クロエの声に応えたのは、ハンマーヘッドに居た白コートの男だ。

「で、どうするんだい？」

「俺達が出る。ＨＫＢの奴らはなんとかするから、お前達は鉄華団を相手にしろ。」

「了解。」

そう答えた名瀬に、フン、という言葉だけを返し、コートをひるがえす。ブリッジを出て行くと。そこの壁に寄りかかっていた小柄な少女が、

「よっ、聞いたぜ。コウ。ＨＫＢの奴らが出たんだろ？」

と、男に声をかける。

「ああ。壱番艦のユキナリとリンタロウにも声をかけろ。四機出て来

た。こっちも四機で迎え撃つ。」

ＭＳデッキに辿り着いた男と少女。どちらもノーマルスーツをつけないまま、ＭＳに乗り込む。

『緊急発進スクランブルの準備は出来てるぜ。そっちは？』

「いつでも問題ねぇぞ～。」

名瀬の問いに少女の方がそう答えた。

『じゃ、出すぜ。』

『射出準備完了!!　タイミングをお二人に譲渡しま～す。』

というエーコの声に、二人は不敵に笑った。

「新村・コウ。　白式ビャクシキ」

「神木・リツ!!　ガンダム・アンドラス!!」

「「行くぞ（行くぜぇ!!）。」」

勢いよく、ハンマーヘッドから二機のＭＳが飛び出した。白と水色のカラーリングに、金色のラインで鮮やかな紋章を引かれた、機体と、数本のダガーを装備し、ショットガンをその手に持った、魚をくわえた猫のエンブレムの付いたツインアイのＭＳ、コウの百式とリツのガンダム・アンドラスは、迫りくる四機に向かって行く。すると、ハンマーヘッドの傍で隊列を組んでいた三機の高速戦艦から、二機のＭＳが飛び出していた。

『おっす!!来たか、ユキナリ、リンタロウ!!』

と、リツが声を上げる。

『やっほ～、リツちゃん。』

と、やたらとカラフルな、サイケデリック的カラーリングをしたＭＳが、そんな気の抜けた声と共に、リツのアンドラス声をかける。すると、コクピットのモニターに、これまたサイケデリックなバンダナに、先端が緑、黄色、赤とカラフルな白髪の青年が浮かび上がる。

『ゲッ、リンタロウ……。』

リツはリンタロウの事が苦手だ。何故か以前コウが聞いた時は、本能的に気に入らないと答えたらしい。

『ん～？　リツちゃん、どうしたの？』

『な、なんでもねぇよ……それよりユキナリ、お前は大丈夫なのか？　疲れてっから仮眠取ってるって話だったろ？』

と、白髪で眼鏡をかけた青年、ユキナリにリツが問いかける。

『ああ、大丈夫だよ、リツさん。さっきミサキさんに起こしてもらったし、十分寝たし、それに、』

『ちょっと待って、今聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだけど？』

リンタロウの姉、ミサキの名前が出てきて、リンタロウの表情が急変する。それと同時にユキナリの顔が蒼くなったところで、

「おい、いつまで茶番をやってるつもりだ。」

と、コウが声をかける。もう、ＨＫＢの部隊は近くまで迫っていた。先頭の機体、サラのヘルフィヨトゥルが刀を抜いて加速する。

『ッ!!』

そして、ユキナリのＭＳ、リック・グレイズの長剣が、サラの剣戟を受け止める。

『千堂院・サラ!!』

『久しぶりだな、霜月・ユキナリ!!』

それが合図だった。両者各機散開し、二大傭兵組織の戦いの火ぶたが切られた。

「ヒュウ♪」

その交戦の光を確認し、イオが口笛を吹く。

「あいつ等は始めたか。なら、俺も始めるとするかね!!」

アトラスガンダムのブースターを吹かして、ハンマーヘッドに急襲を仕掛けようとするその瞬間、二機のＭＳが、飛び出してきた。片方はロングレンジライフル、もう片方は、薙刀の様な装備をした、テイワズのＭＳ百錬だ。

「アイツらは……。」

二ィ。と、イオの口に笑みが浮かぶ。携帯音楽プレーヤーのスイッチを入れる。

「いいねぇ、そう来なくっちゃ!!　オーディエンスがダボついた鼻チョウチンぶら下げた鈍重なデブだけじゃ物足りねぇ!!」

そして、勢いよくブースターを吹かせ、ヒートサーベルを抜いて薙刀を持った百錬に切りかかる。そして、それを受け止めた百錬のスピーカーから。

『流石ですね、イオ少尉!!』

と、声が聞こえた。　イオの事を少尉、と、連邦軍の階級で呼ぶ者。そして、呼び捨てが基本の彼に階級を突ける人物…そんな人間は限られている。

「その声は、お前……、ナンシーか!?」

イオの問いに答える様に、百錬のコクピット内映像が、アトラスのコクピットに映し出された。そこに映っていたのは、金髪のロングヘアーの少女。

『アタリです。イオ少尉!!』

サンダーボルト宙域で散った学徒兵の一人、ナンシーが、そこに居た。

培った物

「俺とあの義足野郎とジオンの戦車野郎だけだとは思わなかったけどよ、まさか、お前らが来てるとはな。」
　スローなジャズが流れるアトラスのコクピットの中で、イオはそう、二機の百錬に話しかける。
「ええ。マルバのブタから聞いたときは驚きましたよ。」
　そう言う金髪の少女はナンシー・シャテンバーグ。薙刀装備の百錬に乗る彼女は、サンダーボルト宙域で命を落としたはずだった。
「で、今はタービンズのメンバーってわけか。」
「一応。ですよ。」
　そういうそばかすが残るあどけない顔のツインテールの少女。つやのある絹のような黒髪と白い肌はアジア圏の人間の証。
「瑠鈴（ルーシャンイン）音」
「はい!!　お久しぶりです、イオ先輩!!」
　メンバーの中でもひときわ年齢が若く、そして活発な、戦争を一切知らないペーペーだった。にもかかわらず、最後までしぶとく生き抜いた少女だ。
「私、南洋同盟のテロに巻き込まれて、気が付いたら……。」
「なるほどね。で、それがお前らの機体か。」
「はい!!」
「兵装をカスタムした百錬です。」
「で、俺と戦うって？」
　ドラムスティックを鳴らしながらそう問いかけると、
「見てください、イオ少尉、」
「私たちの成長を!!」
　と、薙刀とロングライフルを構える。
「ハッ!!」
　イオはスティックでプレーヤーを操作する。流れる曲はジャズの名曲、テナーマッドネスが流れ出す。
「いいぜひよっこども!!　どれだけ成長したのかテストしてやる!!」

そう言うと、無遠慮にレールガンをぶっぱなす。
「うわっ!?」
「キャッ!?」
とっさに躱す二人に、サブレッグでイオは肉薄してくる。
「ッ!?」
ナンシーがとっさに構えた薙刀で、イオのヒートサーベルを防ぐ。
「ちょっ、イオ先輩!?」
「どうした!? 俺たちは敵同士だぜ? 殺す気で来い!!」
その笑みに、ナンシーも獰猛な笑みで返す。
「そっちがその気なら、容赦しませんよ!!」
「あとで泣いても許してあげませんからね!!」
瑠が放った狙撃中の弾丸を、素早くかわす。
「いいねぇ!! ペーペーの頃からセンスはあると思ってたが、いい狙撃だ!! だがなぁ!!」
サブレッグを使った不規則なジグザグ軌道で瑠に照準を絞らせない。
「くっ!!」
「生憎俺は、スナイパーって職業が大嫌いなもんでね!!」
肉薄するが、
「ナンシー!!」
「お任せ!!」
「チッ!!よく見てやがる!!」
そばに控えていたナンシーの振るう薙刀を回避。さらに、
「これでっ!!」
左手に構えたライフルから弾丸を放つ。
「当たらねぇ!!」
それを避けてアトラスのアサルトライフルを発射するが、二人は散会して狙いを絞らせない。
「いいねぇいいねぇ。あのひよっこどもが成長してるじゃねぇの!!」
複雑な軌道を繰り返して、狙撃と連射を回避しつつ、そう叫ぶイオ。
「そこですっ!!」

しかし、ナンシーの放ったライフルにマウントされたグレネード弾を、瑠の狙撃が撃ち抜く。
「うおっ!?」
至近距離の爆発に、思わず体制を崩すイオ。
「頂きッ!! シーサーペント!!」
「うおっ!?」
そして、ナンシーが伸ばした何かが、イオのシールドに張り付き、電流を流す。とっさにシールドをはがすことで、左腕のパワーダウンで済ますことができた。
「そこだ!!」
さらに、ナンシーの百錬が、薙刀をもって襲い掛かる。
「くっ!!」
右手のサーベル一本ではリーチもパワーも足りていない。
「そこっ!!」
「ちいっ!!」
さらに、瑠の機体からの援護射撃が飛ぶ。サブレッグを利用することで辛うじて避けるが、ナンシーの押しに耐え切れず、アトラスが体制を大きく崩した。
「もらったアァァァ!!」
「まさか……!!」
薙刀を追撃で振るってくるナンシーに、イオは目を見開いた。
「まさか、ここまで俺を楽しませてくれるとはなぁ!!」
サブレックを利用した回転で薙刀の一撃を回避。と、同時にナンシー機の両腕を切り落とす。
「なっ!?」
「ナンシー!?」
そのまま動きが止まった瑠に肉薄し
「隙ありィ!!」
「え、」
狙撃中と頭部を破壊し、そのまま蹴り飛ばす。
「さて、まだ続けるかい?」

不敵な笑みを浮かべるイオ。それに、少女二人は、
「まったく、イオ先輩には、」
「敵わないなぁ。」
と、苦笑した。

「で、こうなったと。」
そして、イサリビに帰還したイオに待っていたのは、タービンズと交渉成立した。という連絡だった。実は、名瀬も、ファントム・ウルフも、彼らの実力を確かめたかったそうだ。
「……なるほどね。」
イオは、悪い笑みを浮かべているＨＫＢのケイジと、ファントム・ウルフのコウを見る。
「俺たちは……アンタらの手のひらってわけか？」
にらみを利かせるオルガに、
「ごめんね～。こうでもしないと認めないって、名瀬に言われちゃってさ。」
「ま、八百長疑われないために俺たちを雇ったのは正解だったな。」
金をもらえば何でもするからな。と、そう付け加える。
「ま、コイツらとは、マルバより旧知の仲だったからな。」
名瀬はそう言う。
「……今回の損失は？」
ダリルの問いには、
「ああ。マルバには体で払ってもらうさ。」
「うわぁ。」
その言葉にアトラは少しばかり同情した。ヤクザ組織の【体で払う】なんて、マルバはあの脂肪とは別れを告げることになるだろう。
「お茶です。」
と、今度は褐色肌の女性が入ってくる。
「「「「……。」」」」
その席にいたダリル、イオ、オルガ、ビスケット、アトラ、クーデ

リアは出ていく女性を眺めている。それを見た何故は、
「ん？　何か気になることでもあるのか？」
と、首をかしげる名瀬に、
「いや、さっきからアンタ以外の男を見ないもんでな。」
と、イオが言うと、名瀬はさも当然というように、
「ああ。だってここは、俺のハーレムだからな。」
「「「「は？」」」」
一同、固まる。イオもダリルもオルガも唖然とし、クーデリアとアトラに関しては顔を真っ赤にしている。因みに先ほどから終始無反応だった三日月は、
「ねぇ、ハーレムって何？」
と、質問して、顔を真っ赤にしたアトラに吹っ飛ばされていた。
「ハハハッ。なんだ？　もしかして照れてんのか？」
笑う名瀬に、ダリルが、
「えっと、ハーレムってのはその、俺らとアンタの言葉の認識が違うとかじゃなくて、ここのクルーは全員アンタの奥さんってことか？」
「そうだな。戸籍上はね。」
「……。」
今度こそ固まるダリル。それもそうだ。彼のようなオールディーズが趣味の純愛系（カーラ教授一辺倒）の人間には理解できないとかいう次元ではないだろう。
「ま、マジかよ……。」
イオもこれには思わず苦笑いだ。
「まぁ、何はともあれ、これからよろしくな、鉄華団。お前たちは正々堂々戦って、テイワズへの切符を手に入れたわけだ。歓迎するぜ？」
名瀬は、そう言って笑みを浮かべた。

犀星　《迫る影》

「見えてきたよみんな。アレが歳星だ。」
　と、ケイジが戦艦内にアナウンスをかける。船外カメラの後継が見えるテレビやブリッジ、窓などからいろいろな人がそれを見に来た。
「これが……歳星……!!」
「おいおい、いくら何でもデカすぎだろ!!」
　サンクチュアリも巨大だが、それ以上の全長を誇る歳星にイオとダリルも唖然とする。
「スゲェ!!　でけぇ!!」
「おいやめろって、みっともねぇだろ。」
　と、子供に交じってはしゃぐシノとそれを抑えるユージン。
「凄い……。」
「確かに、デカいね。」
　圧倒されているアトラに同調する三日月と、各々が反応を示す中、この船は歳星へと近づいていった。

「それじゃぁ大人組は、交渉頑張ってね～。」
　と、のんきな声を出すケイジ。
「ああ。これくらいは、俺達の力でやり遂げて見せるさ。アンタは……。」
「ああ。観光案内なら任せてよ。このテイワズの本拠地、移動する小さな星ともいえるような歳星には何度か来てるからね。」
　と、手をひらひらふるケイジ。
「それじゃ、いってらっしゃ～い。」
　というケイジの声をバックに、彼らはテイワズのトップ、マクマードの邸宅へと向かっていった。
「さてと……それじゃぁ、君たちは今のうちにいろいろ見てみよっか。」
　と、ケイジが言えば、鉄華団の子供組の面々ははしゃぎだすのだっ

た。
「イオ先輩はこっちですよ。」
「色々積もる話とかありますもんね～。」
にこやかにそう言うナンシーと瑠。イオはこの二人に捕まったのとあのそそっかしい性格で何かしでかされては困るため、落ち着いたダリルを交渉役の一人に引っ張ってきていた。
「それじゃあお前ら、このくじを引いてくれよな。」
そういってレコが用意したクジを引き、引率を決めることに……

「で、アンタらがパイロットか。」
そこから少し時間が流れ、マクマード・バリストンの邸宅、その書斎。鉄華団は、タービンズの兄弟組織として、テイワズの傘下に下ることが決定した後、三日月とダリル、そしてクーデリアが残った。
「こんなガキが、タービンズの実力者とってのも驚きだが、」
と、大柄な初老の男、マクマードはそう呟いてダリルの方に目を向ける。
「アンタのそれは、名誉の負傷ってわけかい。」
「……ああ。この義手義足は俺の誇りだ。」
マクマードの目には、三日月に対する侮りも、ダリルに対する哀れみもない。
「二人とも随分と良い目をしている。いっぱしの、いや、それ以上の戦士の目だ。」
「……戦士か。」
そう言ってダリルは苦笑した。
「おや、何かまずかったかい？」
「いや、何も問題はない。ただ、望んでこうなったわけじゃない。という話さ。」
「まぁ、そりゃぁそうだろうなぁ。」
と、ダリルの言葉にそう答えて息をつくマクマード。
「誰だってそうさ。望まない結果になる奴なんて星の数ほどいる。」

「……。」
「アンタもそうなの？」
　無言でいるダリルとは違い、三日月はそう問いかける。
「……そうさなぁ。確かに今の座には満足しちゃぁ居るがな、あの時ああしてれば、この時こうしていれば、そう思う事なんてごまんとあるぜ。」
「じゃぁ、俺達と違うね。」
「ん？」
　三日月の言葉に、マクマードは眉をひそめる。
「俺たちは満足なんてしてないから。後悔はしないなんてことはないと思うけど、まだ満足できるところまで、走ってるところだから。」
「いいねぇ、その目。」
　その声に嬉しそうに笑みを浮かべるマクマード。
「ウチの専属の技師に声をかけてやる。武器の新調に期待の調整、出来る限り叶えるように言っておくぜ。」
「ん。ありがと。」
　三日月はそう彼に礼を言う。一方でダリルは、
「なら頼みがある。」
「ん？　なんだ？」
「俺の、サイコ・ザクのシステム周りは触らないでくれ。」
「……お前さん、ウチの腕を疑ってんのかい？」
　マクマードが顔をしかめ、声が一段低くなる。ただいるだけで体から漂っていた覇気が、ひしひしと放出される。もしこの場にイオがいたら、ダリルの腕が義肢では無かったら、きっと汗をかいていただろう。
「そういう訳じゃない。」
「なら何故だ？」
「あれはシステム周りが特別だ。それに……。」
　ダリルは口元に触れる。あの日、出撃前に約束とともに交わしたキス。その感触は今でも鮮明に思い出せる。あの、愛する人との時間は、たとえ時空が二人を隔てても、

「触れられたくないんだ。大切な物だから。」
「……そうか。」
とだけ言うとマクマードは、あれだけ放出していた覇気を納めた。
「ならそう口利きしておいてやる。そうだ、」
クーデリアとはまだ別で用件がある。それを話し合うからと出ていこうとした二人を、マクマードは呼び止めた。
「今度はもう一人のパイロットも連れてきな。よっぽどの非礼がない限り俺は目くじらなんざ立てないからよ。」
どうやら、彼らの思惑は見透かされていたようだ。その言葉に三日月は頷き、ダリルは苦笑して外へと出ていった。

一方、火星から地球への正規航路、ギャラルホルンの鑑査船では、
「おっすガエリオ、傷の調子はどーよ？」
と、扉を開けてブリッジに来た、頭に包帯を巻いたガエリオをノエルが出迎える。
「かすり傷だと言ってるだろう。それより、お前のその服装はどうなんだ。」
「んー？」
というのも、彼の服装はオレンジのけばけばしいフードに口元を隠すプレート、そしてイエロー地の衣服に黒のフリルのついたミニスカと、どう考えても女性な服装をしていたのだ。
一応彼はギャラルホルンに登録されている性別は男性だし自覚する性別も男性であるとだけ銘打っておく。
「別にいーだろ男が女の服着たって、こーいうのヘンタイオヤジは好きなわけだし。」
その恰好でプラプラと足をゆするノエル。ブリッジの操縦士たちはたとえノエルのドコにナニがついていたとしても二人の方向を向かないように必死である。
もともとノエルの顔立ちは下に履くもので第一印象が変わるくらいに中性的だ。こうしてみると愛くるしい活発そうな少女にしか見

えない。だが、ガエリオが言いたいのはそういう問題ではない。
「何で任務中に私服なんだ!!　お前らも!!」
そう、このブリッジの面々、全員が私服姿なのだ。
「おやガエリオ、聞いていないのかい？」
と、これまた小洒落たアクセサリーを身にまとった中国服姿のリーヴァルが現れた。
「何をだ？」
すると彼は笑みを浮かべて、
「今日はギャラルホルンの私服デーだということを。」
「私服……なあぁ!?」
私服デー。それは固い規律のギャラルホルンの中でガスがたまってしまわないよう、私服で出勤して軍人たちの中でコミュニケーションをとり結束を固めることを目的とした、一日私服で出勤する日だ。
この日を忘れて制服で来たものはイジられる。センスのない服を着てきた者もイジられる。センスのいい私服を着てきた者だけが、モテる。
よって、ほのぼのとした空間でコミュニケーションを確立するのが目的だったこの日はファッションセンスの有無を問われるサバイバルと化していた。
「やーい制服が私服ヤロー」
「ふざけるなお前らこんな時だけ息ぴったりになりやがって……!!」
前後からリーヴァルとノエルにあおられて悔しそうにするガエリオ。
「そうと知っていれば何かしら持ってきたのに……!!」
残念なことに今のガエリオが持っているのは外域用のスーツとこの制服だけだ。この後監査船では、しばらく、ガエリオの屈辱がこだましたらしい。
「はー。それにしてもマクギリスのヤロー。休暇でどっか行きやがって。」
せっかくアイツの私服姿も拝んでやろーと思ったのによー。
と不機嫌そうなパネルでアピールするノエル。

「このタイミングで休暇なんて不思議な話ではあるけどね。大方どこかで何かイタズラでも仕込んでるんだろうさ。」
腕を組んでそういうリーヴァル。
「イタズラ、ねぇ。」
散々いじられた挙句、『制服王』と書かれたカラフルなタスキを駆けられたガエリオがそうボヤく。
「そういえば奴は信用できるのか？」
ガエリオの言うやつ、とは火星からの出立の時、鉄華団を裏切ったせいで脱出ポットに放り込まれて送られてきたトド・ミルコネンだ。
「どっかの海賊を使うとか言ってたよな～。なんだったっけよ。ブルドッグ？」
「ブルワーズじゃないかい？」
「そうだよそれだ!!　どうすんだよ？」
リーヴァルにそう問いかけるノエル。
「問題ない。すでに手は打ってあるよ。」
そう言って微笑むリーヴァルの笑みに、ガエリオは、
「おお、これは海賊連中には同情だな。」
と苦笑した。

一方舞台は変わって地球、ギャラルホルンの本拠地である海上に浮かぶギガフロート、ヴィーンゴルーヴ。その総司令官でありマクギリスの父、イズナリオ・ファリドは、そのヴィーンゴルーヴの指令室で書類を読んでいた。
「……。」
書類の内容は、鉄華団に関する報告書。それを机の上に置き、右手の人差し指で机をたたきながらしばし考えこんで、立ち上がった。
そして、本棚から数このファイルを半分だけ他の本より出るように引っ張る。
そして最後に一冊の赤い本を押し込むと、スイッチが入る音がして本棚が開いた。隠し通路だ。

「……。」
その奥へ、杖を突きながら無言で入って行く。
「む、」
階段を下りた先で出迎えたのは、一台の狼……型のロボットだ。細い尻尾のようなユニットが揺れ動いている。
『何をしに来た。』
そのロボットは敵意を隠すことのもせず、赤い頭部ユニットを光らせながらそういう。
「……躾が成っていないな。」
その犬に、そう一瞥してから、奥へと進んでいく。そして、スイッチを入れた。
薄い明かりがつき、そこに見えたのは、異様な人間たちだった。いや、それを人間と言えるのかさえ分からない。全身が機械のようなパワードスーツに覆われたスキンヘッドの男。手が生えたボールのようなユニットといる褐色の女性は義手のような腕を複数持って千手観音のようになっている。白髪の小柄な少女は体育座りのままこちらを睨み付けて、その隣の男性がそっと彼に手を置いている。そして彼らはみな、この隠し通路を歩いた先にあった、牢獄のような場所に繋がれていた。
『これはこれは。』
すると声がする。薄明かりがついた中でも一際暗い、一番奥の牢獄だ。その中から現れたのは、黒のボディスーツに身を包んだ女性だ。顔は後頭部も覆うフェイスマスクに覆われて髪すらも見えない。
そのフェイスマスクの右半分には、機械が複数結合されたような大きなカメラアイがキュルキュルと音を立てている。
『一生をこの薄暗い世界で朽ちていくと思っていたところに思わぬ客人が来たものだな。』
両手の手錠に鎖付きの足枷でつながれた彼女は一際拘束が厳重だ。
『情の無い鬼がここに何をしに来た。』
そう言う彼女の声からも、イズナリオに対する憎悪がありありと感じる。

「最後の任務だ。」
　彼女の質問に答えるようにそう言って、牢屋の横にあるディスプレイに触れてボタンを操作する。すると、鉄格子が開き、彼女の手錠と鎖が取れた。
『……最後の任務はここでゆっくりと朽ちていくことではなかったのか。』
　カメラアイをキョロキョロと動かしながら、女はそう言う。
『貴様に人並みの情があるとは思えないが』
「相も変わらず失礼な女だ。」
『貴様のような外道に対する礼儀など持ち合わせていない。』
　吐き捨てるようにそう言う。
「何はともあれ、貴様たちはこの任務を成功させれば自由だ。」
「信用ならないわね。」
　そう言ったのは褐色の女性だ。
「なんとでも言え。」
　それにイズナリオはそう答え、
「任務は、クーデリア・藍那・バーンスタインとその護衛、鉄華団の抹殺。」
「それで自由とはな。」
　そう言ったのは少女の側の男だ。赤と黒のボディスーツに口元以外を覆い隠す仮面。しかし、その奥からは敵意が感じられる。
「無論君たちには自由を確約しよう。」
　それを意に介すことなく彼は言い、
「さぁ、さっそく取り掛かってくれ。」
　そう言うと、イズナリオが来たのとは別の扉が現れる。イズナリオはそのまま、来た道を戻って行ってしまった。
『奴は嫌いだ。』
　そう呟く犬型ロボット。
「誰だってそうよ。」
　褐色の女はそう言って現れた扉に触れる。
「リリイ。あなたに子犬ちゃん（リトル・パピー）のお世話は任せるわ。」

そう、体育座りをしていた少女に言って。
「あのオヤジが俺に命令をするほどだ。鉄華団とやらには期待が持てるな。」
スキンヘッドの男もそう言って出ていく。
「自由、ね。」
ぽつりとつぶやいて歩いていく少女。
『俺達には無縁だったものだな。』
そう言ってロボットもついていく。
「お前は自由を手に入れたらどうする？」
残されたフェイスマスクの女と白髪の男。男が彼女にそう問いかけた。
『決まっている。』
と、出ていきながら。
『あの男を殺す。』